

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 下屋敷遺跡

—市道王寺川48号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

新潟県長岡市教育委員会

## 例　言

1. 本書は、新潟県長岡市関原町1丁目に位置する下屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、市道王寺川48号線道路改良事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原因者である長岡市が負担した。
4. 遺物の注記は、09+遺跡略号(SY)の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。
6. 調査の体制は以下のとおりである。

平成21年度　本発掘調査

調査主体　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
現場代理人　瀬戸 和之（株式会社 吉田建設）  
調査補助員　松井 智（株式会社 吉田建設）

平成22年度　整理作業

調査主体　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
調査員　山下 研（株式会社 吉田建設）

7. 本書の執筆・編集はすべて調査担当が行った。ただし、「第IV章　自然科学分析」についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）  
浅井 勝利　駒形 敏朗　前嶋 敏　パリノ・サーヴェイ株式会社　新潟県教育長文化行政課

発掘作業員

安達 進士　石井 昌子　郷 時男　小宮 久子　清水 正巳　竹内 裕美　中村 サチ　中村 フサ  
野村 幸治　本田 ユキエ　増川 武輝　山田 修

整理作業員

五十嵐 晴子　佐々木 美紀　長沼 直美

# 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 本発掘調査	5
1 調査区の設定	
2 調査の経過	
3 基本層序	
4 遺構の説明	
5 遺物の説明	
第Ⅳ章 自然科学分析	14
第Ⅴ章 まとめ	20
参考文献	

## 挿図・表目次

第1図 遺跡位置図	1	第2図 周辺の遺跡	4
第3図 グリッド設定及び基本層序図	6	第4図 重鉱物組成および火山ガラス比	16
第5図 火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率	17	第6図 重鉱物・軽鉱物	19
第1表 周辺道路一覧	3	第2表 重鉱物・火山ガラス比分析結果	16
第3表 遺物觀察表	22		

## 図版目次

図版 1 遺跡全体図	図版 2 遺構平面分割図 1	図版 3 遺構平面分割図 2
図版 4 遺構平面分割図 3	図版 5 遺構平面分割図 4	図版 6 遺構平面分割図 5
図版 7 個別遺構図 1	図版 8 個別遺構図 2	図版 9 個別遺構図 3
図版 10 個別遺構図 4	図版 11 個別遺構図 5	図版 12 個別遺構図 6
図版 13 個別遺構図 7	図版 14 個別遺構図 8	図版 15 出土遺物 1
図版 16 出土遺物 2	図版 17 出土遺物 3	図版 18 出土遺物 4
図版 19 出土遺物 5	図版 20 調査写真 1	図版 21 調査写真 2
図版 22 調査写真 3	図版 23 調査写真 4	図版 24 調査写真 5
図版 25 調査写真 6	図版 26 遺物写真 1	図版 27 遺物写真 2
図版 28 遺物写真 3	図版 29 遺物写真 4	

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

## 調査に至る経緯

平成 20 年 5 月に長岡市土木部道路建設課（以下、事業者と略称）から長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）に対し、市道王寺川 48 号線道路改良工事に係る埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。対象地域は、昭和 28 年の耕地整理に伴う緊急調査で平安時代の遺跡が発見された下屋敷遺跡が存在している。事業計画地の一部が、下屋敷遺跡の範囲内にあたるために事業着手前の埋蔵文化財の調査が必要である旨を事業者に伝えた。事業計画地のうち下屋敷遺跡の範囲内に位置している部分は約 4,000 m<sup>2</sup>である。しかし、安全面や事業工程を考慮し、また新潟県教育庁文化行政課の指導も仰ぎ、調査対象範囲は歩道と既存の道路部分を除いた、今回新たに拡幅される車道部分の約 1,500 m<sup>2</sup>について調査対象とした。調査の実施時期は、当該地域は平成 22 年度に工事が着手されることから、平成 20 年度に確認調査を行い、その結果を基にその後の協議を行い、必要があれば平成 21 年度に本発掘調査を行うことで合意した。

その後、事業者から市教委経由で新潟県教育委員会教育長に文化財保護法 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の通知が行われ（平成 20 年 11 月 17 日付長道建第 337 号）、市教委は文化財保護法第 99 条 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し（平成 20 年 11 月 21 日付け長教博第 429 号）、平成 20 年 11 月 25 日～27 日の 3 日間で確認調査を行った。確認調査の結果、遺構と平安時代の遺物が検出された。これを踏まえ事業者との協議を行った結果、工事の計画変更することは困難で、遺跡の現状保存が困難なことから、工事着手前に記録保存のための本発掘調査を実施することで合意した。また、本発掘調査時期は、稲作が行われることから、稲刈り後に実施することとした。

市教委は、文化財保護法第 99 条 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手で文化財を新潟県教育委員会教育長に報告し（平成 21 年 9 月 24 日付け長教博第 221 号）、本発掘調査を開始した。



第 1 図 遺跡位置図 (1 : 10,000)

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 1 遺跡の位置

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市町村合併により西は日本海から東は守門岳までの広大な範囲が市域となっている。下屋敷遺跡が所在する長岡地域は、その中央部を日本一の長さと流水量を誇る信濃川が縱断し、その両岸に沖積平野が広がっている。平野は信濃川の氾濫原となっており、現在の集落は、氾濫原に残された微高地に形成されている。

平野部の東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵が位置している。東山丘陵は、標高700mを越える急峻な地形で、北北東に向かって次第に高度を下げ、そこから信濃川に流れ込む栖吉川や椿桂川などの中小河川によって山裾に扇状地が形成されている。その扇状地に主に縄文時代から古代の遺跡が存在している。

西側には東頭城丘陵から派生する西山丘陵が位置している。西山丘陵は、南南西から北北東に延びる丘陵で、東頭城地方では、1,000mを越えた標高も長岡市周辺では300m程になり、沖積地に埋没している。丘陵の麓には数段の河岸段丘が形成されており、これらの河岸段丘は上流の中魚沼郡津南町・十日町市・小千谷市から続く大規模な段丘で、旧石器時代から縄文時代の遺跡が数多く存在する。段丘面は高いところほど形成期が古く、長岡付近では高いところから高寺面・閑原面・上富岡面・深沢面に区分されており、閑原面・深沢面は沖積地の下に埋没している。下屋敷遺跡は、ちょうど丘陵が沖積面に埋没する境界付近の標高は約25mのところに位置している。

### 2 周辺の遺跡

下屋敷遺跡の周辺には遺跡が数多く分布している。その多くは発掘調査が行われておらず詳細は不明であるが、発掘資料と採集資料から主な遺跡を概観することにしたい。

旧石器時代の遺跡は長岡地域で五住山遺跡・長峰団地西遺跡・大沢遺跡の3遺跡確認されているが、全て西山丘陵の高位及び中位面に位置する。いずれも石器が1点ずつ表面採集されているのみで、遺跡の規模や性格は不明である。五住山遺跡の石器は黒曜石製の尖頭器で、旧石器時代末期に位置づけられる。

縄文時代の遺跡は草創期から前期の遺跡は少ないが、中期になると急激に増加し、また晩期に向かって減少する。草創期の遺跡は、上の沢遺跡・藤橋蛇新田遺跡・堆子打場遺跡の3遺跡で、旧石器時代の遺跡同様、表面採集資料が1点ずつあるのみで、遺跡の詳細は不明である。なお、現在藤橋蛇新田遺跡は、藤橋遺跡の一部として登録されている。早期から前期の遺跡は、大積地区に集中しており、金塚B遺跡・キザワシ遺跡・七軒町遺跡・焼山遺跡の4遺跡が確認されている。早期の七軒町遺跡からは、堅穴住跡1棟が条痕文土器とともに出土しており、数少ない早期の遺跡として貴重である。

中期では、「火焔土器」の出土遺跡として全国的に有名な馬高遺跡が中位段丘の閑原面に位置する。馬高遺跡は、馬蹄形の環状集落を持つ大規模な集落である。その周辺にも同時期の転堂遺跡・南原遺跡・瓜割遺跡などが所在している。馬高遺跡に隣接する三十稻場遺跡は、縄文時代後期の三十稻場式の標識遺跡である。また、玉作りを行っていたことが明らかとなっており、当地域の玉生産の状況を知る上で貴重な遺跡である。晩期に属する藤橋遺跡では、住跡が堅穴住居は弥生時代に属するもの以外ではなく、掘立柱建物跡のみが確認されている。岩野原遺跡は中期から晩期に営まれた大規模な集落遺跡である。

弥生時代は、中期初頭の尾立遺跡、三ノ輪遺跡などが所在する。尾立遺跡は、掘立柱建物跡によって構

成される集落跡である。また、縄文時代晩期まで続く藤橋遺跡に隣接するため、両者の関係が注目されるところである。三ノ輪遺跡は、中期の再葬墓が出土しており、近接した地域に集落が存在することが想定される。当地域の古墳時代に属する遺跡は、浄円寺山遺跡で少量の遺物が発見されているが、確実なのは大萱場古墳のみである。大萱場古墳は、出土遺物と埋葬施設から古墳時代後期の7世紀初頭に位置づけられる古墳である。埋葬主体部が、「横穴式木芯窓室」と称される特異な構造であるため、被葬者が渡来系氏族の可能性が指摘されている。

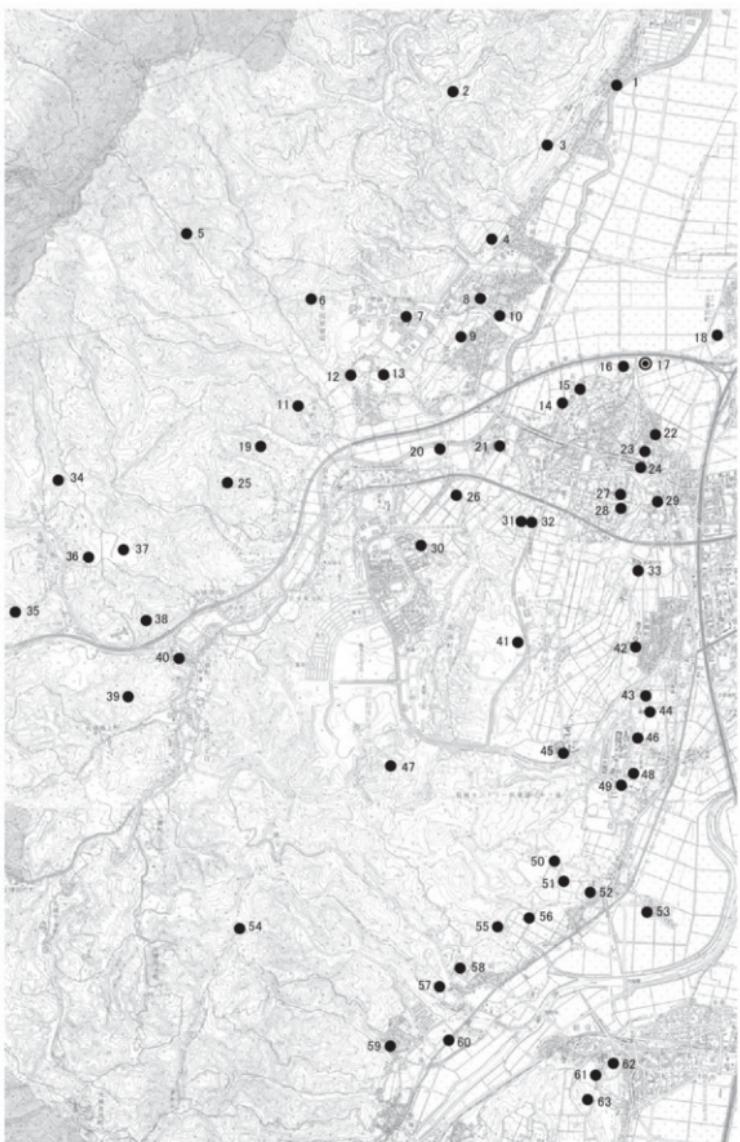
古代において長岡地域は、古志郡の範囲に属すると考えられている。発掘調査が行われた下屋敷遺跡・白鳥蛇山遺跡・岩野原遺跡は、平安時代に属する遺跡である。岩野原遺跡・白鳥蛇山遺跡は、掘立柱建物跡が1~2棟発見されているが、遺物も少なく小規模な遺跡と考えられる。下屋敷遺跡は、過去の調査で遺物が多量に出土し、その中に「田」や「上」の字の墨書き器が含まれており、大規模な集落遺跡と考えられる。

古代の窓跡は、西山丘陵に篠山窓跡・岩野原窓跡・羽黒窓跡・薩堤窓跡の4ヶ所確認されており、現在の親沢町から西津町の段丘の東斜面に集中している。そのうち、発掘調査が行われているのは篠山窓跡のみであるが、他の窓跡から遺物が表面採集されており、これらの窓跡が操業されていたのは8世紀代であると考えられる。この付近で8世紀代にさかのぼる集落遺跡が見つかっていないことから、その消費地が注目されるところである。

中世は、古志郡の中に5つの荘園と2つの国衙領の保が展開しており、西山丘陵付近は白鳥荘と紙屋荘と大積保の境界にあたる。丘陵の山頂部には、尾根に沿って地形を有効に活用した山城の片刈城跡・三丁田城跡・雲出城跡・岩野城跡などが位置する。また、集落跡や館跡は、低位段丘面や段丘の裾部に立地している。藤橋遺跡や下屋敷遺跡でも中世の遺構・遺物が確認されており、断続的に利用されていたことがわかる。館跡は、文献資料も残っておらず、明治期の地籍図などから存在を想定している遺跡が多いが、その中で上除館跡は発掘調査が行われ、15世紀前半に成立し16世紀に入って廃絶することが明らかとなつており、周辺地域を支配する領主の拠点と考えられている。この他、黒川左岸の白鳥町では、いわゆる備蓄蔵が単独で発見されており周辺の遺跡の調査を含めて、出土穀貨の性格を追及する必要であろう。これらの遺跡の年代は、概ね15世紀以降に位置づけられ、それ以前の遺跡は極めて少ない。

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	根立	縄文	22	上除館跡	中世	43	薩堤窓跡	古代
2	鳥越城跡	中世	23	浄円寺山	古墳・古代・中世	44	藤橋	縄文・中世
3	別当山	縄文	24	転堂	縄文	45	大沢	旧石器
4	日吉	古代	25	冠之内城跡	中世	46	尾立	弥生
5	雲出城跡	中世	26	白鳥蛇山	古代	47	片刈城跡	中世
6	岩野城跡	中世	27	上の沢	縄文	48	田富同農学校跡	弥生
7	大萱場古墳	古墳	28	五住山	旧石器	49	長峰	不明
8	舟岡	縄文	29	南原	縄文	50	羽黒窓跡	古代
9	火振り坂	縄文	30	城扣	縄文	51	達子打場	縄文
10	上向	縄文	31	三十塙場	縄文	52	紙屋船跡	中世
11	西宮本城跡	中世	32	馬高	縄文	53	新保	古代
12	若野	縄文	33	日輪原	縄文・古代	54	木梨城跡	中世
13	岩野原館跡	中世	34	金塚B	縄文	55	岩野原窓跡	古代
14	三ノ輪	縄文・弥生	35	キザワシ	縄文	56	岩野原	縄文・古代
15	瓜破	縄文	36	大平	縄文	57	電竜寺	古代
16	開原館跡	中世	37	沢の入	縄文	58	猿山	縄文・古代
17	下屋敷	古代・中世	38	三丁田城跡	中世	59	武下条の経塚	中世
18	拂平	古代	39	猿山	縄文	60	若田	古代
19	五塵谷城跡	中世	40	七軒町	縄文	61	朝日	縄文
20	中之坊寺跡	中世	41	高寺城跡	中世	62	浦郷	縄文・古代・中世
21	白鳥の古錢出土地	中世	42	長峰辻地西	旧石器	63	立矛	縄文・弥生

第1表 周辺遺跡一覧



第2図 周辺の遺跡 (1 : 50,000)

## 第III章 本発掘調査

### 1 調査区の設定

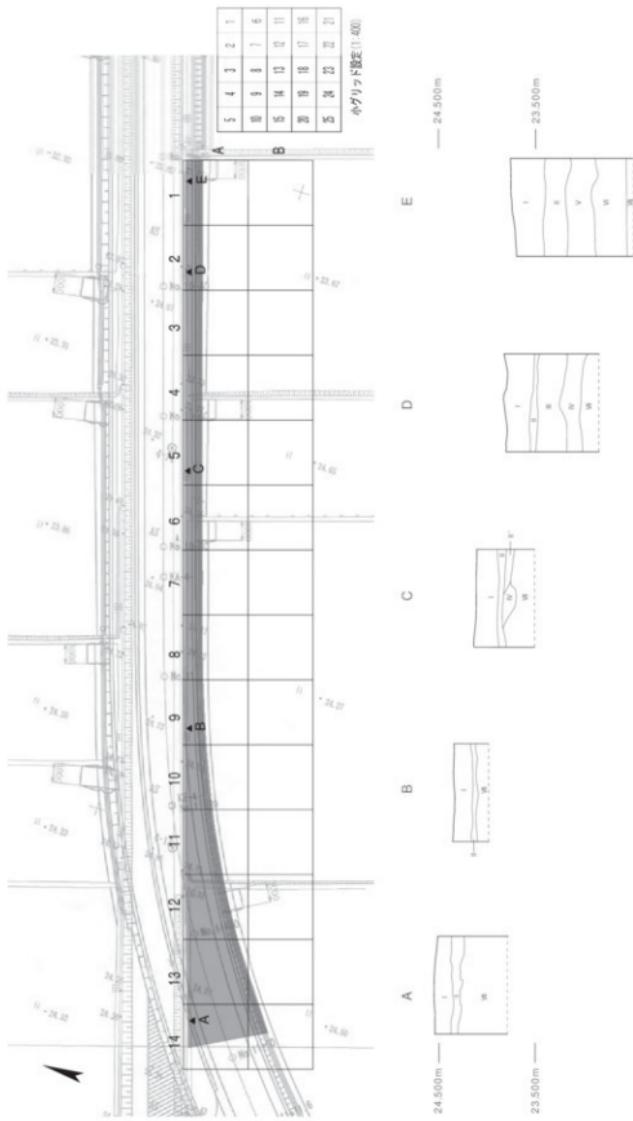
グリッドは、調査区北側のラインを基準線とし、調査区北東角を基準点として、基準線に沿って  $10 \times 10\text{m}$  の大グリッドを  $14 \times 2$  区画設定した。さらに、1つの大グリッドを  $2 \times 2\text{ m}$  の 25 区画に分割し小グリッドを設定した。グリッドの名称は、大グリッドが東から西にアラビア数字の 1・2・・・・、北から南にアルファベットの A・B とし、小グリッドは北東角を基準に東から番号をつけ、1 A 10 のように大グリッド → 小グリッドの順で呼称した。

### 2 調査の経過

平成 21 年 9 月 24 日に機材を搬入し、28 日から調査を開始した。表土剥ぎは、調査区の東から行った。当初は、遺物包含層を確認できたが、西進し標高が高くなるに連れて遺物包含層が薄くなり、6 グリッド付近からは確認できなくなった。表土剥ぎは 30 日まで行い、それと同時に進行で調査区壁の整形と排水溝の掘削を行った。10 月 6 日から包含層掘削と遺構検出作業を行った。包含層掘削では、2 A 2・3・7・8 グリッドでまとまって古代の遺物が出土した。調査区の中央部は、遺構の密度が希薄であった。また、調査区西側の標高の高いところでは溝や井戸など遺構が多く検出された。遺構検出作業は、10 月 14 日まで行った。10 月 15 日から遺構の調査を開始した。13 A 19・24 にまたがる柱根を伴う柱穴 (P50) が検出された。P50 を基に東側に延びる掘立柱建物跡を想定したが、精査してみると土坑や井戸などが検出され、その後その他の遺構との関連を検証したが、P50 と結びつく遺構が見出せず、建物跡を復元できなかった。11 月 12 日に井戸の断ち割り調査を残し、遺構調査を完了した。13 日にラジコンヘリによる空中写真撮影と遺構平面測量を行った。その後、調査に際し、暗渠等の制約がなく、安全が確保できる井戸について、バックホーにより断ち割り調査を行い、堆積状況を確認した。断ち割り調査では、井戸内の土が崩落てくるため、安全を確保しつつ慎重に調査を行った。25 日には、井戸の断ち割り調査を終了し、埋め戻しを開始した。24 日には、基本層序 A で、火山灰サンプルを採集した。27 日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

### 3 基本層序

調査区の現況は、水田となっている。土壤の堆積状況は、I～VII 層に分類できる。I 層は、暗褐色土層で、現在の水田耕作土及び畦畔盛土である。II 層は、褐灰色土層で水田床土である。部分的に黄褐色土粒を微量に含む。基本層序 C で見られる II' 層は、褐灰色土層であるが、炭化物を微量に含む。III 層は、標高の低い東側部分で見られる暗褐色粘土層である。炭化物を微量に含む。IV 層は、黒褐色粘土層で黄褐色土粒を含む。古代の遺物を含む遺物包含層である。V 層は、褐灰色土層で、しまり、粘性ともにやや強い。VI 層は、黒色粘土層で IV 層とともに遺物包含層であると考えられるが、IV 層よりも粘性が強く、遺物の出土量は少ない。6～14 グリッドでは遺物包含層が確認されず、II 層と VII 層の境目の部分に遺物を少量含む。遺物包含層は、過去の耕地整理によって削られたものと考えられる。VII 層は、黄褐色粘土～灰黄色粘土層で、遺構検出面である。粘性が強く、硬くしまっている。遺構検出面は、西端で標高  $24.300\text{m}$  、東端で標高  $23.000\text{m}$  を測り、西から東に向かって傾斜する地形である。



第3図 グリッド設定(1:750)及び基本層序図(1:50)

#### 4 遺構の説明

##### 溝

**S D 1** 14A 2・7で発見された、東西に並行する遺構である。確認された規模は幅0.86m、長さ1.52m、深さ0.16mである。長軸方向は、N-82°-Wである。覆土は、II層と類似する暗灰色土を主体としており、所属時期はかなり新しいものと考えられる。出土遺物はない。

**S D 2** 11A 15から12Aを横切るように発見された。確認された規模は、幅1.06m、長さ約10m、深さ0.20mである。長軸方向は、N-82°-Wである。SD 2は、SD 3およびSD 6を切っており両者より新しいものと判断できる。出土遺物は、須恵器・土師器・珠洲焼・近世陶磁器である。SD 1とともに覆土は暗灰色土を基調としており、近世以降の溝であろうか。

**S D 3** 11A 5・10・15で発見された。確認された規模は、幅1.09m、長さ約4.5m、深度は浅く0.21mを測る。長軸の方位は、N-10°-Wである。出土遺物は、須恵器・珠洲焼である。

**S D 4** 11A 3・8・13で発見された。確認された規模は、幅0.87m、長さ約4.5mで、深度は非常に浅く0.06mを測る。長軸方向は、ほぼ南北に合っている。

**S D 5** 5A 2・7で発見された。確認された規模は、幅1.42m、長さ約2m、深さ0.30mを測る。長軸方向は、N-5°-Wである。断面形は、テラス状の段を有する台形状である。青花皿が出土している。

**S D 6** 主に12Aで発見された。確認された規模は、長さが南北約2.5m東西約14.5m、幅1.13m、深さ0.45mを測る。断面形態はU字状である。12A 6で直角に折れる。SD 6は区画溝と考えられ、大部分は調査区の北側に広がっているものと推定される。出土遺物は、珠洲焼の片口鉢が出土している。

##### 井戸

井戸は、全部で24基発見された。空中写真撮影後、安全面と暗渠の制約がない遺構について、バックホウによる断ち割り調査が可能な遺構について、底面および覆土の堆積状況の確認を行った。平面形は、円形および梢円形であり、断面形状はほぼ垂直のU字状あるいは台形状である。確認できた範囲では、すべて素掘りの井戸である。遺物は、検出面付近で微細な土師器・須恵器・陶磁器等が出土しているが、下位層からの遺物の出土はほとんどない。

**S E 1** 13A 25で発見されている。平面形はやや不整な梢円形で、規模は長径1.03m、短径0.8m、検出面からの深さは2.2mを測る。壁面が崩落したため、断面図を記録できなかった。断面形態はU字状である。遺物は検出面に近いところで微細な土師器・須恵器が確認されているが、遺構の時期を特定することはできない。

**S E 2** 14A 11で発見された。平面形は、やや不整な梢円形で、規模は長径1.24m、短径0.96m、検出面からの深さは約2.3mまで確認した。確認できた深度までの断面形態は、下に行くほど幅が狭くなっていた。覆土からは、石臼の破片が出土している。

**S E 3** 9A 10・15で発見された。平面形は不整な梢円形で、規模は長径1.00m、短径0.9mを測り、検出面からの底面の深さは約2.6mまで確認した。断ち割り調査は、作業の安全上の都合から部分的なものとなつたため、底面の一部分しか確認できなかつた。遺構検出面に近いところで、瀬戸焼の皿が出土した。

**S E 4** 13A 9で発見された。平面形はやや不整な円形を呈し、規模は長径1.04m、短径0.86mで深さは0.87mまで確認した。SE 4は、暗渠排水が遺構の中を通っていたため、断ち割り調査を行うことができなかつた。覆土からの出土遺物はない。

**S E 5** 13A17で発見された。平面形は比較的整っている円形で、規模は長径0.97m、短径0.9m、検出面からの深さは1.50mである。断面形状は、U字状を呈している。覆土は、上部がレンズ状に堆積し、下部は水平堆積している。中間の5・6層ではⅦ層の土が多量に見られる。出土遺物は、6層から白磁の皿が出土している。

**S E 6** 14A16で発見された。平面形は、やや不整な円形で、規模は長径0.74m、短径0.62m、検出面からの深さは2.30mである。S E 6はP18に切られている。断面形状は、下位で上位よりも広くなっているやや不整なゆるいU字状を呈している。最下層の6層から漆器が出土している。

**S E 7** 14A16で発見された。S E 6に隣接している。平面形は、やや不整な梢円形で、規模は長径1.52m、短径1.00m、検出面からの深さは2.61mである。断面形状は、下位で段を持つやや不整な台形状である。覆土からの出土遺物はない。

**S E 8** 13A7・12で発見された。平面形は、やや不整な梢円形で、規模は長径1.01m、短径0.62m、深さは検出面から約0.8mまで確認した。出土遺物はない。

**S E 9** 13A6で発見された。平面形はやや不整な梢円形であり、規模は長径0.88m、短径0.83mを測り、深さは検出面から約0.8mまで確認した。覆土は、1・2層でⅦ層の土を多く含んでいる。出土遺物はない。

**S E 10** 12A10で発見された。平面形は、不整な円形で、規模は長径0.80m、短径0.76mを測り、深さは検出面から約0.9mまで確認した。覆土からの出土遺物はない。

**S E 11** 12A9で発見された。平面形は、やや不整な梢円形であり、規模は長径0.71m、短径0.71mで検出面からの深さは約0.8mまで確認した。覆土からの出土遺物はない。

**S E 12** 13A11で発見された。平面形は梢円形であり、規模は長径0.71m、短径0.57m、深さは検出面から1.24mである。断面形状は、袋状で下半部が膨らむ形状である。覆土は、水平堆積している。出土遺物は、底面から曲物が出土している。

**S E 13** 12A15で発見され、S E 12に隣接する。平面形は梢円形で、規模は長径1.20m、短径0.94m、深さは検出面から1.88mを測る。断面形状は台形状である。最下層から刀子の柄が出土している。

**S E 14** 13A24で発見された。平面形はやや不整な円形で、規模は長径0.83m、短径0.82mで、深さは検出面から約0.7mまで確認した。出土遺物はない。

**S E 15** 12A15で発見された。平面形はやや不整な梢円形である。規模は、長径0.72m、短径0.65m、深さは検出面から0.77mである。断面形状は、箱形である。標高がほぼ同じ12~14グリッドに位置する他の井戸と比べると、深さが1mに満たないS E 15は非常に浅い井戸である。上位層から土師器片が出土している。

**S E 16** 13A23で発見された。平面形は、一部が調査区外にかかるため全体がつかめなかつたが、不整形な梢円形になるものと推測される。断面確認部分での径は1.19mである。覆土から須恵器・土師器の微細な破片が1点ずつ出土している。また、検出面付近で、青磁片を出土した。

**S E 17** 8A10・9A6で発見された。平面形はやや不整な円形である。規模は、径0.85m、深さは検出面から1.71mを測る。断面形状は台形状を呈するが、部分的に底部からの立ち上がりが内傾する。覆土の堆積は水平である。

**S E 19** 3A6で発見された。遺構の一部が開渠にかかっていたため、正確な平面形は不明であるが、やや不整な円形になると推測される。規模は、径0.92m、深さは検出面から0.67mである。覆土の堆積は

水平で、断面形状は台形である。上位層から微細な須恵器・土師器が出土している。

**S E21** 2 A 3で発見された。平面形は、一部が調査区外にかかるため全体がつかめなかつたが、不整形な梢円形になるものと推測される。断面確認部分での径は0.96mである。上位層から土師器・須恵器が出土している。

**S E22** 2 A 3・8で発見された。平面形はやや不整な梢円形である。規模は、長径1.04m、短径0.76m、深さは検出面から約0.6mまで確認した。覆土は水平堆積である。上位層から須恵器・土師器が出土している。しかし、S E21とともに須恵器・土師器がまとめて出土したSK24を切っているため、SK24から入り込んだ可能性もある。

**S E23** 4 A 3で発見された。平面形はやや不整な円形である。規模は、径0.72m、深さは検出面から2.29mである。断面形状は、断ち割り調査の際に覆土が崩落し、堆積状況の記録をとることができなかつた。出土遺物はない。

**S E24** 12 A 7で発見された。S E24はSD2・6に切られている。そのため、平面形は不明であるが、SD2およびSD6の底面で確認された平面形は不整な梢円形であり、規模は長径約1m、短径約0.9mである。出土遺物はない。

#### 土坑

**S K1** 14 A 22で発見された。平面形は不整形で、長径1.00m、短径0.82mである。断面形状は、台形状の部分と柱穴状に深くなっている部分があり、一様ではない。出土遺物はない。

**S K2** 13 A 25で発見された。平面形はやや不整な梢円形であり、規模は長径0.54m、短径0.34m、深さは0.32mである。覆土は水平に堆積する。出土遺物はない。

**S K3** 13 A 14で発見された。平面形は円形で、断面形状は箱型である。規模は、長径0.63m、短径0.55m、深さ0.28mである。覆土は、VII層の黄褐色土を主体としている。出土遺物はない。

**S K7** 7 A 10で発見された。平面形は不整形な梢円形である。断面は、底面が平らでテラスがある台形状を呈している。規模は、長径0.94m、短径0.60m、深さ0.46mである。出土遺物はない。

**S K8** 7 A 9で発見された。遺構の一部は開渠にかかっており、正確な形状は不明である。確認された部分での規模は、径0.56m、深さ0.42mを測る。覆土は水平に堆積し、断面形状は台形状である。出土遺物はない。

**S K9** 6 A 8・9で発見された。遺構の大部分が調査区外にかかっており、正確な形状は不明である。確認されている部分での規模は、径約2.2m、深さ0.36mである。覆土は暗褐色土が主体となっている。出土遺物は、須恵器・土師器が出土している。

**S K10** 主に5 A 5で発見された。遺構の一部は開渠にかかるため正確な形状は不明であるが、平面形はやや不整形な隅丸方形になるものと考えられる。規模は、長辺1.7m以上、短辺1.44m、深さ0.24mである。覆土は、単層である。出土遺物は須恵器・土師器が数点出土している。

**S K11** 5 A 4で発見された。平面形は不整形で、規模は長径0.53m、短径0.52m、深さは0.18mと浅い。覆土は柱穴状に堆積しており、建物跡に関連するものと考えられるが、SK11とつながる遺構は発見されなかつた。出土遺物はない。

**S K12** 12 A 18・19・23・24で発見された。遺構が調査区外にかかっており全体はつかめないが、平面形はやや不整な長方形と推測される。断面形状は箱型である。覆土の堆積は、上層はII層の土が堆積してい

るが、黒褐色土が主体である。覆土から須恵器と底面から古銭が9枚出土しており、古銭は状態が悪く図示できたのは7枚である。出土した古銭の初鋤年が最も新しいものは、元祐通宝の1086年である。須恵器は9世紀末ころのものと考えられるため、覆土に紛れ込んだものと考えられる。

**S K14** 12A14・15で発見された。平面形はやや不整形な楕円形であり、規模は長径0.61m、短径0.46m、深さ0.67mである。断面形状は柱穴状となる。覆土から土師器が出土している。

**S K16** 4A1・2で発見された。平面形は不整形な方形で、規模は長径1.33m、短辺0.96m、深さ0.47mを測る。底面は平らで、断面形状はテラス状の段を設けた箱型である。出土遺物はない。

**S K18** 4A7で発見された。平面形は楕円形で、規模は長径0.58m、短径0.41m、深さ0.27mである。底面は凹凸しているが、断面形状は概ね台形状を呈す。出土遺物はない。

**S K19** 4A1で発見された。遺構は調査区外まで伸びているため、形態は不明である。規模は、長径約1.9m、短径約1.8m以上、深さは0.16mである。底面は平らで、小さな段を持つ形態である。出土遺物はない。

**S K20** 3A5で発見された。遺構は、調査区外まで伸びているため形態は不明であるが、やや不整形な楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径0.8m以上、短径0.86m、深さ0.16mである。出土遺物はない。

**S K21** 3A7で発見された。遺構は調査区外まで伸びているため形態は不明であるが、やや不整形な円形を呈するものと考えられる。規模は、長径0.71m、短径0.60m以上である。出土遺物はない。

**S K22** 3A11で発見された。平面形はやや不整な円形で、規模は長径0.54m、短径0.52m、深さ0.26mを測る。断面形状は台形状で、覆土は単層である。出土遺物はない。

**S K23** 2A9で発見された。S K23は開渠にかかっていたため、正確な形状は不明である。規模は長径0.6m以上、短径0.60m、深さ0.49mである。断面形状はテラスを持つ台形状である。出土遺物は、土師器が出土している。

**S K24** 2A3・8で発見された。S K24は、SE21・22に切られており、形態は不明である。深さは0.44mである。出土遺物は、須恵器・土師器が出土している。

**S K27** 4A5・10および5A1・6で発見された。遺構は、調査区外まで伸びているため形態は不明であるが、やや不整形な円形を呈するものと考えられる。規模は、長径2.76m、短径1.8m以上、深さ0.20mである。覆土は黒褐色土を主体としており、主に水平に堆積する。出土遺物は、須恵器・土師器・珠洲焼が出土している。

#### 性格不明遺構

**S X 1** 14B2・3 グリッドで発見された。遺構は調査区外に延びており、平面形は不明である。深さはごく浅く0.12mである。SD1を切っていることから、所属時期はかなり新しいものと考えられる。出土遺物はない。

**S X 2** 12A12・17 グリッドで発見された溝状の遺構である。遺構は、調査区外まで延びており、さらにSD2に切られているため、全体は不明である。断面はゆるいU字状で、覆土は水平堆積している。出土遺物は、珠洲焼片が出土している。

**S X 3** 9A1 グリッドで発見された。遺構は調査区外まで広がっており、平面形は不明である。断面で幅2.13m、深さは一部深いところもあるが0.1m程度である。出土遺物はない。

### 掘立柱建物跡

**S B 1** 10Aグリッドと11Aグリッドにまたがる部分で発見された。建物の規模は、2間分を確認。建物跡は北に広がっていくものと推測される。確認できた部分の柱間は約1.8mである。柱穴は、長径58.0～68.0cm、深さ50cm程度を測り、平面形は円あるいは稍円形を呈する。柱穴の覆土は、黒褐色土を基調とするが、柱痕は確認できなかった。遺構からの出土遺物がないため、遺構の時期は不明である。

### ピット

P50は、柱材が残っており掘立柱建物の一部であると考えられるが、これと組む柱穴をほかに見つけることができなかつた。P142から珠洲焼片が2点出土している。このほかいくつかのピットからは遺物が出土しているが、微細な破片資料であるため、図示できなかつた。多くのピットは、遺物を含まず、その性格は不明である。

## 5 遺物の説明

今回の発掘調査では、古代の須恵器、土師器を主体として約1,500点の遺物が出土した。また、中世の土器、陶磁器も少量出土し、その分類や時期については、珠洲は[吉岡1994]、瀬戸は[藤沢2005]、白磁は[横田・森田1978]、青花は[小野1982]を参考にした。

**S K 9** 須恵器の杯蓋(1)、無台杯(2・3)、有台杯(4)、土師器の長甕(5)が出土した。1は、口縁部が下方にしっかりと折れる形態で、宝珠部分は欠損している。2・3は無台杯である。2は器壁が厚手で、口径11.8cm、底径7.0cmを測る。3は器壁が薄手である。法量は、口径12.9cm、底径8.0cmで2よりも大きい。4は、やや丸みを帯びた底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。端面がやや窪む内端接地の高台が付く。1とセットになるものである。1と4は、小泊窯跡の製品ではない。5は、長甕の胴部である。内面外面ともにカキ目が施されており、外面はヘラケズリされている。

**S K 10** 須恵器の無台杯(6)が出土した。底径6.6cmで、切り離しは回転ヘラ切りである。

**S K 12** 須恵器の無台杯(7)が出土した。口縁部は欠損している。器壁は薄手である。

**S K 14** 須恵器の甕の胴部破片(8)が出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具を当てている。

**S K 15** 須恵器の有台杯(9)が出土した。器壁は薄く、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。断面形状で短い高台が付く。

**S K 23** 須恵器の杯蓋(10)、無台杯(11)が出土した。10は、扁平な宝珠形のつまみが付く。天上帝付近はヘラケズリされている。11は口縁部資料で、口径は12.4cmを測る。

**S K 24** 須恵器の杯蓋(12)、無台杯(13～23)、有台杯(24・25)、土師器の椀(26～28)、小甕(29～33)、長甕(34～37)が出土した。12は小型の宝珠形のつまみである。無台杯は、ほとんどが口径11.5～12.9cm、底径6.8～8.9cm、器高3.0～3.7cmの範囲に入り、切り離しはすべて回転ヘラ切りである。18は底面に墨書きが書かれているが、文字の判読はできなかつた。24は内面に漆膜が付着していた。25は、底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部に向かって直線的に伸びる形態である。高台は、端面がやくぼみ、外端接地である。26は、口径15.2cm、底径7.2cm、器高5.7cmを図る。切り離しは、回転糸切りである。27は、口径14.8cm、底径6.4cm、器高4.3cmを測る。底部の切離しは、摩滅が激しく確認できない。28は、内外面ヘラミガキで調整後、内面が黒色処理されている。器壁は、26・27に比べるとやや厚い。小甕はすべて

平底の底部資料である。切り離しは、摩滅が激しく確認できないものもあるが、確認できたものは回転糸切り未調整である。34は、資料が小片であるため、口径は出せなかった。35は、口縁部が「く」の字状に外反し、端部は上方につまみ出され、受け口状となっている。口縁部外面にススが多量に付着している。調整は、外面にカキ目が施されている。36は、口縁部が上方に長く立ち上がり、端部をわずかにつまみ出している。37は、口縁部は「く」の字状に外反し端部をつまみあげており調整は、内面にカキ目が施されている。

**S K27** 須恵器の杯蓋(38~42)、無台杯(43~44)、高台杯(45)、土師器の椀(46~48)、小甕(49~51)、長甕(52)、珠洲焼の甕(53)が出土した。38は、扁平な宝珠形のつまみを持つ。39は、ボタン状で中央が座むつまみである。口縁部が不明であるが、全体的に扁平な形態になると想定される。40~42は、口縁部が下方にしっかりと折れる形態である。43は、酸化焰焼成の無台杯である。底部の切離しはヘラ切りである。44は口径 13.8 cm を測り、口縁が外に大きく聞く形態である。45は、端面がやや窪み、外端接地する高台が付く。底部から胴部の境目の稜は明瞭である。46は、口縁部は胴部から内湾しながら伸びてくる。口径は 11.7cm を測る。47は、内面がヘラミガキされている。49は、小甕の口縁部と思われる。資料が小片であるため口径は出せなかった。50は、底径 7.1cm を図る。底部切離しは回転糸切りである。51は、小甕の底部資料である。器壁は全体が平滑に調整されており、薄手である。52は、底部に近い胴部下半の資料である。底部は丸底になると思われる。内外面両方ともハケ調整される、西古志型の甕である。53は、甕の胴部破片とみられ、外面並行タタキされ、内面には円形押圧痕が残る。

**S E 3** 潤戸焼の端反皿(54)が出土している。54は、口縁部が外反する形態である。外面とともに黄色味がかった釉が薄くかかっている。時期は、大室 2 期のものであろう。

**S E 5** 白磁の皿(55)が出土した。55は、内面に 1 段棱を持つ。釉は外面とともに緑色味がかった釉が薄くかかっているが、外面底部まではかかっていない。白磁皿 VI 類に分類されるものと考えられる。この時期の遺物はほかになく、伝世したものであろうか。

**S E 15** 土師器の長甕の胴部片(56)が出土している。56は、外面は平行タタキが当てられている。

**S E 16** 檢出面付近で青磁の椀(57)が出土した。口縁部の小片である。

**S E 19** 珠洲焼の片口鉢(58)が出土している。内面には卸し目が施されており、1 単位幅 2.3cm(10 本)である。全体が被熱を受け、内面には炭化物が付着する。時期は、V 期にあたると考えられる。

**S E 22** 3 層から須恵器の杯蓋(59)と有台杯(60)が出土した。59は、全体的に扁平な形態で、口縁部は下方にしっかりと屈曲している。天上で付近はヘラケズリされている。60は、方形の高台が取り付く。胴部は、底部から口縁部にかけてまっすぐ立ち上がる形態で、浅身の形態である。

**P 142** 珠洲焼の甕(61・62)が出土している。61は甕あるいは甕の胴部上方の肩の部分である。外面は平行タタキされ、内面には円形押圧痕が残る。62は甕の底部資料である。底径 10.8cm を測る。外面は平行タタキされている。時期は、V 期に属するものと思われる。

**S D 5** 青花皿(63)が出土した。口縁端部が外反する。時期は、小野正敏氏の分類に従えば、B 1 群に分類でき、15 世紀後半から 16 世紀前半に位置づけられる。

**S D 6** 珠洲焼の片口鉢(64~66)が出土した。64は片口鉢で、口径は 33.3cm を測る。口縁外端は引き出され、広い端面を持ちわずかに外傾する。残存部に卸し目はみられない。これらは IV ~ V 期に属すると思われる。65は、全体がほぼ復元できる資料で、口径が 33.4cm、底径 13.9cm、器高 10.5cm を図る。口縁外端は引き出され、わずかに内傾する広い端面を形成している。内面には 1 単位幅 2.7cm(12 本)の卸し目

が施されている。内面は底部から口縁端部にかけてよく研磨され、器面が平滑になっている。66は片口鉢の胴部で内面には1単位幅2.2cm(10本)の卸し目が密に施されている。胎土は粗い。

**S X 2** 珠洲焼の甕片(67)が出土している。67は、甕の肩の部分に相当するものと考えられる。外面は綾杉状のタタキ目、内面は円形の押圧痕を残す。

**造構出土土器** 68~75は須恵器の無台杯である。70は、底部から胴部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部に向かってまっすぐ伸びる。72は底部外面に墨書きが書かれているが、文字として判読できなかった。73は、器壁が厚手。底部の切離しが回転糸切りである。小泊窯の製品ではない。76~78は須恵器の有台杯である。76は、小型で深身のタイプである。高台は端部が若干産み、外端接地する。77は、胴部から口縁部にかけてまっすぐに伸びる。78は、底部から口縁部に向かってまっすぐ伸び、器壁は薄手である。高台は、端面が若干産み内側につまみ出されたような断面で、内端接地している。79は、須恵器の小甕の口縁部と考えられる。口縁部がやや外反する形態で、端部は面取りされている。80は、須恵器の甕の胴部である。内外面ともに平行タタキの当て具を当てている。81・82は土師器の楕である。2点とも切離しは、回転糸切りである。82は、口縁部がまっすぐに伸びる。83~85は小甕の底部である。81は内面にロクロナデの痕を明瞭に残している。85は、小甕の口縁部である。口径14.4cmを測り、口縁端部はやつまみ上げられている。86は土師器の長甕である。口縁部は「く」字状に外反し、端部はつまみ出している。87は、珠洲焼の甕の口縁部である。外面は平行タタキの痕を残し、内面はナデされている。時期はIV期にあたるものと思われる。88は、珠洲焼の片口鉢である。内面は卸し目が施されているが、器面は卸し目が一部消えるほど研磨され平滑になっており、卸し目の詳細は不明である。底部の切離しは静止糸切りである。

#### 木製品

89は、P50から出土した柱根である。丸木を使用している。直径は、20.8cmを測る。90はS E 6の最下層から出土した漆器の皿である。全面黒漆が施され、内面に赤漆で絵が描かれている。15世紀頃のものと思われる。91・92はS E 12から出土した。91は径9.4cmの小型の曲物である。底板を側板の中にはめ込み、木皮で縫い止めている。92は曲物の側板で、91の一部である。93はS E 13から出土した刀子の柄である。2枚で一組になっており、内側はえぐられている。半分よりや上方に目釘穴があけられている。

#### 石製品

94は、臼の上臼である。S E 2から出土した。下面の目は、浅い溝によって分断されている。目のパターンは不明である。95は、臼の下臼である。SD 6から出土した。上面の目のパターンは8分画であり、1区画の溝の本数は6本を基本としているが4本の部分と7本の部分がある。上面はやや凸面となり、下面是えぐりが大きい。96は、砥石である。表裏面および左右側面のすべての面を使用している。上下端は欠損している。

#### 古銭

97~103はSK12から出土した古銭である。全部で9枚出土したが、状態が悪いものを除いた7枚について掲載した。古銭は、天聖元寶(初説年1023年、97~98)2枚、景祐元寶(初説年1034年、99)1枚、皇宋通寶(初説年1039年、100)1枚、元豐通寶(初説年1078年、101~102)2枚、元祐通寶(初説年1086年、103)1枚である。

## 第IV章 自然科学分析

### 下屋敷遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### 1 はじめに

下屋敷遺跡は、新潟県長岡市関原町に所在し、信濃川下流域の左岸側を流れる支流の黒川と内海川に挟まれた段丘の北端部付近に位置する。この地域の段丘は、活堀曲や活断層によって変位を受けている河成段丘とされ、[太田・鈴木 1979] は上位より A 面から F 面までの区分を行っている。この区分に従えば、下屋敷遺跡の位置する段丘面は、B 面に区分されている。[早津・新井 1982] は、A 面から F 面までの各地形面について、指標テフラの産状から形成年代を推定しており、B 面については、大山倉吉アテラ (DKP: 町田・新井, 1979) の降下の少し前の約 5 ~ 6 万年前と推定している。ただし、この年代は DKP の噴出年代を 4.5 ~ 4.7 万年前としていることによるものであり、[町田・新井 2003] による DKP の噴出年代の「5.5 万年前をやや遅る」という値を取れば、B 面の形成年代については、約 6 ~ 7 万年前と考えることができる。

下屋敷遺跡の発掘調査内で作成された土層断面は、現地表面を構成する水田耕作土とその下位の水田床土の下位に、褐色を呈する粘土質のシルト層からなる層位とその下位の灰褐色を呈する粘土質のシルト層からなる層位に区分された。これらの層位は、その層位から段丘表層に形成された土壤であると考えられるが、土層断面にはテフラ層などの対比指標が観察されなかったことから、層序対比が確定されていない。本報告では、本遺跡の土層断面について重鉱物分析および火山ガラス比分析によりテフラの産状を検討し、その産状に基づき、各層の層序対比を行うものである。

#### 2 試料

試料は、発掘調査区西側北壁 (13A 杭西) の基本層序 A 地点 (以下、基本層序 A) より採取された土壌である。発掘調査所見によれば、本地点の堆積層は、上位より 1 ~ 5 層に区分されている。

1 層は、現地表面を構成する水田耕作土とされる暗褐色のシルト質粘土 (層厚約 15cm) である。2 層および 3 層は、水田床土とされる暗灰色を呈する亜角礫 (最大径約 5cm) が微量混じる暗灰色のシルト質粘土であり、下部のやや色調の明るい層位が 3 层として区分されている。層厚は、2 层が約 10cm、3 层が約 5cm を測る。4 層は、褐色シルト質粘土 (層厚約 30cm) であり、中部付近にやや化粧鉄が多く含まれている。また、試料採取地点を記録した資料によれば、4 層と 3 層との間は層界が明瞭であり、3 层中に 4 层に由来するとみられる偽礫が混じる状況が確認できる。このことから、4 层上部は、3 層形成段階で削除等の擾乱の影響を受けていることが推測される。5 層は、灰褐色を呈するシルト質粘土 (層厚 15cm 以上) である。

土壌試料は、1 层上部から 5 层まで、上位より厚さ 5cm 連続で計 13 点 (試料番号 1 ~ 13) 採取されている。試料採取位置は、分析結果を示した図 1 に併記した柱状図を参照されたい。本報告では、2 層下部 (試料番号 4) から 5 层 (試料番号 13) までの計 10 点の土壌試料を分析対象としている。

#### 3 分析方法

試料約 40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm ~ 1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム (比重約 2.96) に調整

により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明鉱物および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

さらに本分析では、抽出された火山ガラスまたは斜方輝石を対象として、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、[古澤 1995] の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

#### 4 結果

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成では、ほぼ土層区分に従って層位的な変化が認められる。すなわち、5層では、不透明鉱物が多く、少量の斜方輝石と角閃石が互いに同量程度で含まれ、5層と4層の層界付近では、不透明鉱物の量比は下位の層位とほぼ同様で多いが、斜方輝石に対して角閃石の割合が多くなる。4層下部(試料番号 10)では、角閃石と不透明鉱物が互いに同量程度で主体を占め、少量の斜方輝石を伴う組成であるが、試料番号 9 以上の 4 層では、斜方輝石と角閃石が互いに同量程度で主体を占め、少量の不透明鉱物を伴う組成となる。3層および2層下部では、斜方輝石が多く、次いで不透明鉱物が多い組成となり、少量の角閃石と微量の斜方輝石も含まれている。

火山ガラス比は、全試料を通じて微量しか含まれず、濃集層準などは認められない。ただし、わずかな差ではあるが、3層および2層中の火山ガラスの割合は、4層および5層のそれよりも若干高い。形態は、各試料ともにバブル型や中間型および軽石型が混在する。

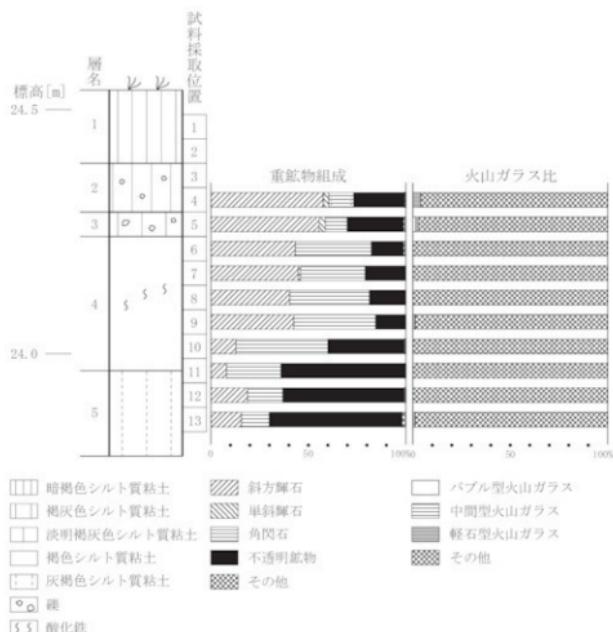
屈折率の測定は、テフラに由来することが確実である火山ガラスを対象とした。ただし、試料番号 4、5 以外の試料についてでは、火山ガラスの含有量が極めて微量であるために、レンジを特定できるほどの結果は得られなかった。また、試料番号 9 については、下位の試料との重鉱物組成の変化が比較的大きいため、特に増加の顕著な斜方輝石を対象として屈折率測定を行った。測定結果を図2に示す。試料番号 4 の火山ガラスは、nL. 499-1, 502 のレンジを示し、モードは nL. 500 付近にあり、さらに nL. 508 付近の値を示す高屈折率の火山ガラスが微量混在する。試料番号 5 の火山ガラスは、nL. 498-1, 501 のレンジを示す。試料番号 6 以下の試料では、nL. 498-1, 502 の範囲内に入る火山ガラスが含まれているが、試料番号 8 では nL. 508 付近、試料番号 11 では nL. 515-1, 519 付近の高屈折率を示す火山ガラスも混在する。試料番号 9 の斜方輝石は、nL. 702-1, 707 のレンジを示し、モードは nL. 704 であった。

#### 5 考察

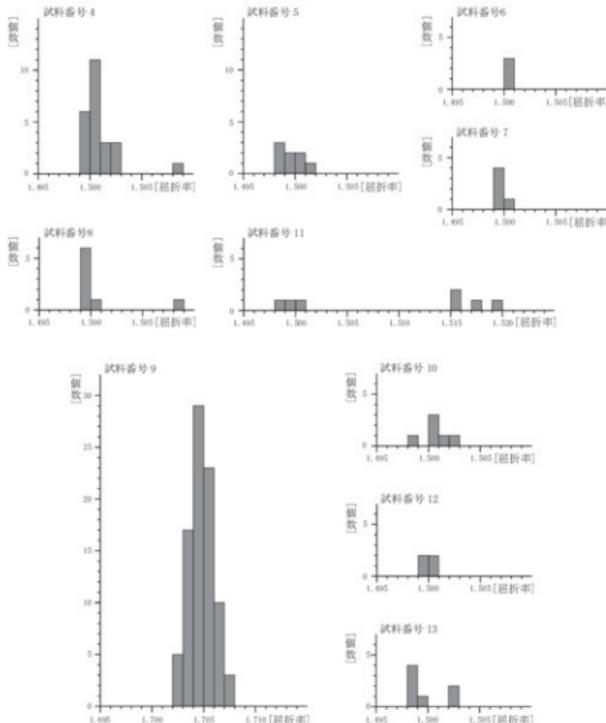
下屋敷跡跡の位置する段丘は、前述したように約6～7万年前に形成されたB面上に区分されている。[早津・新井 1982] は、小千谷市小要田原付近のB面上の堆積層を柱状図に示しており、現地表面を構成する黒色腐植土層の下位に、順に褐色風化火山灰層、シルト層または粘土層、砂層、礫層としている。礫層は段丘疊層である。また、褐色風化火山灰層の最上部に始良Tn 火山灰 (AT: 町田・新井, 1976) の降下堆積層を認めており、褐色風化火山灰層の下部にDKPの降下堆積層を認めている。下屋敷跡跡の基本層序 A の堆積層を、その層相により上記のB面上の層序に対比させるならば、1層から3層までは黒色腐植土層、4層は褐色風化火山灰層、5層はシルト層または粘土層にそれぞれ対比されると考えられる。この場合、4層下部にDKPの降灰層があり、4層最上部には AT の降灰層があることになる。ただし、基本層序 A 地点の資料では、これらのテフラ層は認められず、また、採集試料の内部観察においても軽石や火山ガラスの

第2表 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レンン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計	
4	144	7	32	0	0	65	2	250	1	0	10	239	250	
5	139	8	28	0	0	72	3	250	4	0	4	242	250	
6	108	2	98	0	0	41	1	250	0	0	2	248	250	
7	112	3	83	0	0	52	0	250	1	0	0	249	250	
8	101	0	102	0	0	47	0	250	2	0	0	248	250	
9	106	0	105	0	0	39	0	250	0	0	3	247	250	
10	32	1	118	0	0	98	1	250	1	1	1	247	250	
11	20	1	70	0	0	159	0	250	0	0	0	250	250	
12	47	0	45	1	1	156	0	250	0	2	2	246	250	
13	39	2	36	1	2	170	0	250	0	2	3	245	250	



第4図 重鉱物組成および火山ガラス比



第5図 火山ガラス(試料番号9以外)および斜方輝石(試料番号9)の屈折率

ブロックなどを認めるることはできなかった。

一方、重宝物分析により、4層下部の試料番号10と試料番号9の間の層準で重宝物組成が大きく変化し、試料番号9とほぼ同様の組成が4層最上部まで連続するという確認された。試料番号10と9の間では、色調や粒径などに特に大きな違いは認められなかつたことから、試料番号9における重宝物組成の変化は、テフラの隕灰に起因する可能性が高いと考えられる。上述した小谷市付近のB面のテフラの形状から、そのテフラはDKPであると考えられる。斜方輝石と角閃石を主体とする重宝物組成および斜方輝石の屈折率土、[早津・新井 2008]に記載された妙高火山群テフラ地域におけるDKPの記載とはほぼ一致する。また、DKPの特徴である扁平な結晶形を持ち、透明度の高い斜方輝石も、処理後の試料番号9の重宝物の实体顕微鏡観察により、多く認めることができた。したがって、4層下部(試料番号9)採取層準付近に、DKPの隕灰層準を推定することができる。

基本層序Aの4層最上部では、B面段丘の褐色風化火山灰層最上部にあるとされるATの隕灰層準を示す火山ガラスの濃集層準は検出されなかつた。降下堆積後の搅乱により火山ガラスの濃集層準が不明瞭になった可能性もあるが、3層と4層の色調や碎屑物の状況が大きく異なること、4層(試料番号6)と3層(試料番号5)との間で重宝物組成の違いが大きいこと、さらにそれらの試料の火山ガラスの含有量 자체が微量であることなどを考慮すると、4層最上部にあつた

ATの降灰層準を含む層位は失われている可能性が高い。このことは、前述した資料からの推定とも整合する。

[早津・新井 2008]による妙高火山群テフラ地図におけるATおよびそれ以後のテフラの産状とその特性記載を参照すると、3層の試料番号5や2層の試料番号4に含まれる屈折率 nl. 498-1. 502 の範囲にレンジが収まる火山ガラスのうち、nl. 500 以下でバブル型のものはATに由来する可能性が高く、nl. 500 以上で軽石型のものは、浅間草津テフラ (Ko-K: 町田・新井, 1992) に由来する可能性がある。さらに、試料番号4で検出された微量の高屈折率の火山ガラスは、その産出層位と屈折率から、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah: 町田・新井, 1978) に由来する可能性があると考えられる。ただし、いずれのテフラも今回の火山ガラスの産状では、ATと同様に降灰層準を推定することはできない。

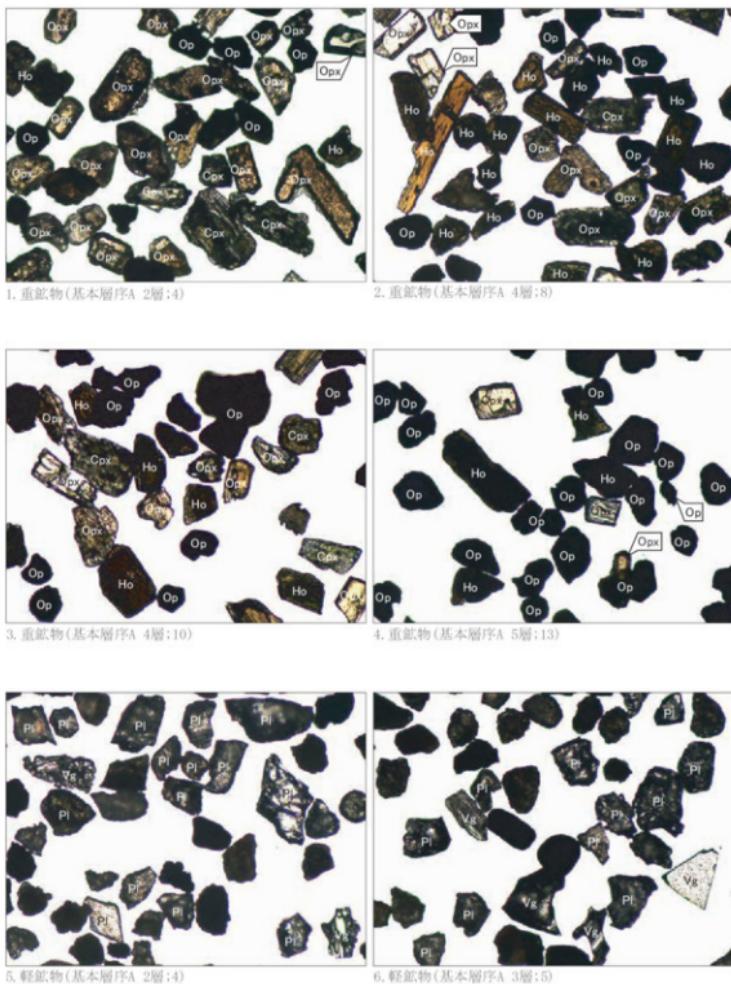
ところで、[高瀬ほか, 2002] は、下屋敷跡から南西方に約2km離れた位置にあり、同じB面段丘上に位置する馬高遺跡において、現耕作土の下位に堆積する黒褐色土層の中部付近に浅間馬高火山灰 (As-Ut) という火山ガラス質テフラの降灰層準を推定している。その記載によれば、火山ガラスの形態は、本報告におけるバブル型を主体として、軽石型をオブカルに含み、その屈折率はnl. 499-1. 506 (モードはnl. 499, 1. 502-1. 503) とされている。これらの記載のみからすれば、黒褐色土層とも言える3層 (試料番号5) や2層 (試料番号4) に含まれる火山ガラスは、As-Ut に由来する可能性もあると言える。ただし、As-Ut の特性には化学組成も含まれており、 $\text{SiO}_2$ - $\text{TiO}_2$ ,  $\text{SiO}_2$ - $\text{MgO}$ ,  $\text{SiO}_2$ - $\text{K}_2\text{O}$  の量比の違いにより3つの組成領域に区分できることが特徴とされている。したがって、今回の火山ガラスの由来の特定には、EDMAなどを用いた化学組成の検討も必要であると考えられる。

基本層序Aの4層 (試料番号6) 以下で検出された微量の火山ガラスについては、バブル型や軽石型が混在し、また、屈折率のレンジも特定できないことから、その由来するテフラを特定することはできない。おそらく、下屋敷跡の位置するB面段丘の南側に分布する一段高いA面段丘 (約15万年前) 上に降灰したAT以前のテフラに由来する火山ガラスが、碎屑物としてB面上に再堆積したものであると考えられる。[早津・新井 2008]による妙高火山群テフラ地図におけるAT以前のテフラの産状とその特性記載を参照すると、nl. 498-1. 502 の範囲内に入る屈折率の火山ガラスは、鬼界葛原テフラ (K-Tz) や御岳第一テフラ (Or-Pal) などが由来として考えられ、試料番号8の高屈折率の火山ガラスは阿蘇4テフラ (Aso4)、試料番号11の高屈折率テフラは阿蘇3テフラ (Aso3) などがそれぞれ由来するテフラとして考えられる。

#### 引用文献

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌 101, 123-133.
- 早津賢二・新井房夫, 1982, 信濃川下流域 (新潟県小千谷市付近) における河成段丘群の形成年代と段丘面の変位速度. 地理学評論, 55, 130-138.
- 早津賢二・新井房夫, 2008, 妙高火山群テフラ地図のテフラ層. 早津賢二著 妙高火山群-多世代火山のライフヒストリー, 実業出版社, 261-313.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰-始良Tn 火山灰の発見とその意義-1. 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫, 1979, 大山倉吉軽石層-分布の広域性と第四紀編年上の意義. 地学雑誌, 88, 313-330.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 太田陽子・鈴木郁夫, 1979, 信濃川下流域における活躍地の資料. 地理学評論, 52, 592-601.
- 高瀬言行・ト部厚志・濱辺秀男, 2002, 馬高遺跡に関する火山灰分析. 馬高・三十稻場遺跡-史跡「馬高・三十稻場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告 I-〈遺構遺物概要編・自然科学分析編〉, 長岡市教育委員会, 99-103.

第6図 重鉱物・軽鉱物



0.5mm

Op: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物, Vg: 火山ガラス, Pi: 斜長石,

## 第V章　まとめ

下屋敷遺跡の発掘調査は、道路の拡幅部分について調査が行われ、溝、井戸、掘立柱建物跡、土坑、ピットなどの遺構と平安時代と中世の土器約1,500点、石臼などの石製品、漆器などの木製品が発見された。

下屋敷遺跡は、昭和27・28年の耕地整理の際に発見され、中村孝三郎(長岡市立科学博物館)によって緊急調査が行われた。その際の調査地点は残念ながら今となっては不明であるが、平安時代の須恵器・土師器と中世の遺物が出土し、堅穴状遺構1基が検出されている。この時の報告(中村 1966)では、奈良時代の土器として認識されていたが、その後の長岡市史の報告では、主に9世紀後半を中心とする時期の遺跡であるとされた。今回の調査で出土した平安時代の土器を見てみると、9世紀前葉から中葉を中心とする時期である。これらを合わせると9世紀全般にわたって営まれた集落であることが分かった。今回の調査で出土した須恵器は、大部分が小泊窯の製品であるが、その他の製品も少量含まれている。西山丘陵沿いには4ヶ所の須恵器窯が確認されているが、いずれも8世紀台に操業していたものと考えられており、下屋敷遺跡の年代とはひらきがある。したがって、小泊窯以外の供給元がどこに求められるのか、今後の検討課題である。また、過去の調査で「田」、「上」、などの墨書き土器が出土している。今回の調査でも2点見つかっているが、残念ながらいずれも文字として認識できなかった。また、過去の調査において、中世の遺物も出土しており、14～15世紀頃に属するものと考えられているが、今回の調査でも珠洲焼、石臼、漆器等が出土し、概ねその時期におさまるものと考えられる。

遺構は、溝、井戸、掘立柱建物跡、土坑等が発見された。溝の年代は、SD6は出土遺物から14世紀後半から15世紀に属する遺構と考えられる。SD3・4・5については、出土遺物が少なく所属時期を明確にすることはできない。長軸方向は3条ともほぼ同じであるが、出土遺物から見れば、SD3・5は中世、SD4は近世の遺構と考えられる。

井戸は全部で24基発見された。断ち割り調査できたものについてみてみると、SE6・12・13の最下層から漆器および木製品が出土しており、これらについては15世紀頃に埋没したものと考えられる。そのほかの遺構についても、遺物が出土せず判断は難しいが、前述の3基と同じく黒色土あるいは黒褐色土を基調とする覆土であることから、概ね15世紀頃のものと考えたい。

SK12は、人骨は発見されていないが、古銭を9枚出土しており、土塙墓の可能性が高い。その所属時期は、古銭の最新年が1086年で11世紀末であるが、この頃の遺物がまったく出土していないことから、遺物が出土している14～15世紀ごろと考えたい。また、信濃川の対岸に位置する三貫梨遺跡(長岡市教委 1986)で発見された土塙墓の形状を参考にすれば、SK16も土塙墓の可能性があろう。しかし、遺物が出土しておらず詳細は不明である。長岡地域においては信濃川の対岸の柄吉地区に位置する三貫梨遺跡、中道遺跡、松葉遺跡で中世の土塙墓群が発見されている。これら柄吉地区で発見された土塙墓は群をなしており、墓域を形成している。下屋敷遺跡においては、土塙墓の可能性が指摘できる遺構が2基発見されたが散在しており、また調査区が狭く、墓域については不明である。

下屋敷遺跡の南方に上除館跡が位置している。上除館跡は過去に一部調査されており、15世紀前半から16世紀前半の遺跡であることが明らかにされている。(長岡市教委 1976) また、上除館の当主に関する詳しい文献は残っていないが、農業生産に基盤をもつ集落を支配する領主の拠点として考えられている。集落遺跡としてはほぼ同時期に営まれていたと考えられる本遺跡との関係は今後の検討課題である。

## 参考文献

- 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
- 長岡市教育委員会 1976 『上除城館址発掘調査報告書』
- 横田賢次郎ほか 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究集録』第4号
- 小野 正敏 1982 「15~16世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 新潟県教育委員会 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
- 長岡市教育委員会 1986 『三貫梨遺跡—第1次発掘調査—』
- 長岡市教育委員会 1987 『三貫梨遺跡—第2次発掘調査—』
- 坂井 秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥ほか 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古
- 長岡市教育委員会 1994 『松葉遺跡』
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 長岡市教育委員会 1998 『中道遺跡』
- 新潟県教育委員会ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 大武遺跡I (中世編)』
- 和島村教育委員会 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV』
- 春日 真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—」『新潟考古』第16号
- 春日 真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号
- 藤澤 良祐 2005 『日本の遺跡5 濱戸窯跡群』 同成社
- 和島村教育委員会 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡IV』
- 長岡市教育委員会 2009 『平成20年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』

第3表 遺物観察表

寺跡土、石英(黄)、長石(長)、角閃石(角)、海綿骨針(海)。黒色粒子(黒)、白色粒子(白)で表記した。

(数字)は、現存値である。厚み、重量は現在値である。

## 土 器

No.	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	深高 (cm)	回転	色調 (外・内)	胎	土	備 考
1	SK9	須恵器	杯蓋	16.8	—	—		灰・灰	素・長		
2	SK9	須恵器	無台杯	11.8	7.0	3.5		に赤い黄橙に赤い黄橙	素・長		小泊産
3	SK9	須恵器	無台杯	12.9	8.0	3.5		緑灰・青灰	素・長		底部へラ切り 小泊産
4	SK9	須恵器	有台杯	14.8	7.9	7.2		黃灰・灰	素・長		
5	SK9	土師器	長甕	—	—	—		浅黄橙・浅黄橙	素・長・繩		外面:カキ目、ヘラケズリ 内面:カキ目
6	SK10	須恵器	無台杯	—	6.6	—		灰白・灰白	長		小泊産
7	SK12	須恵器	無台杯	—	—	8.0		黃灰・灰	素・長		底部へラ切り 小泊産
8	SK14	須恵器	甕	—	—	—		繩灰・灰	素		外面:平行タタキ 内面:同心円當て具
9	SK15	須恵器	有台杯	13.4	6.6	5.8		灰・灰	素・長		小泊産
10	SK23	須恵器	杯蓋	—	—	—		に赤い黄橙に赤い黄橙	素・長・チ		小泊産
11	SK23	須恵器	無台杯	12.4	—	—		灰・灰	素・長		小泊産
12	SK24	須恵器	杯蓋	—	—	—		灰白・灰白	長		小泊産
13	SK24	須恵器	無台杯	11.8	7.5	3.3	左	灰・灰	素・長・繩		小泊産
14	SK24	須恵器	無台杯	11.5	6.8	3.1		灰・灰	素・長・繩		底部へラ切りーナダ
15	SK24	須恵器	無台杯	12.9	6.9	3.0		青灰・青灰	素・長・白		小泊産
16	SK24	須恵器	無台杯	12.2	8.6	3.2		灰・灰	素・長・白		小泊産
17	SK24	須恵器	無台杯	12.6	7.2	3.2		灰・灰	素・長・繩		小泊産
18	SK24	須恵器	無台杯	12.9	7.8	3.7	左	黄灰・黄灰	素・長・繩		底部外面上に墨書「□」・小泊産
19	SK24	須恵器	無台杯	11.8	—	—		灰・灰	素・長		小泊産
20	SK24	須恵器	無台杯	12.6	—	—		灰白・灰白	素・黒		小泊産
21	SK24	須恵器	無台杯	14.0	—	—		黄灰・黄灰	素・長		小泊産
22	SK24	須恵器	無台杯	11.6	—	—		青灰・青灰	素・長		小泊産
23	SK24	須恵器	無台杯	11.6	—	—		灰・灰	素・長		小泊産
24	SK24	須恵器	有台杯	—	—	—		灰・灰	英		内面塗付着 小泊産
25	SK24	須恵器	有台杯	13.6	7.4	7.8		灰・灰	素・長		小泊産
26	SK24	土師器	碗	15.2	7.2	5.7		浅黄橙・浅黄橙	素・長・繩		底部系切り
27	SK24	土師器	碗	14.8	6.4	4.3		浅黄橙・浅黄橙	素・長		
28	SK24	土師器	碗	11.6	5.0	4.3		に赤い根・黑褐	素・長・海		内外面ロクロナダ→ミガキ 内面黒色処理
29	SK24	土師器	小甕	—	8.8	—		浅黄橙・黄橙	素・長・角・手		
30	SK24	土師器	小甕	—	8.1	—		浅黄橙・浅黄橙	素・長		
31	SK24	土師器	小甕	—	8.0	—		に赤い根・浅黄橙	素・長		底部系切り
32	SK24	土師器	小甕	—	7.3	—		に赤い根・に赤い黄橙	素・長		底部系切り
33	SK24	土師器	小甕	—	6.3	—		灰白・浅黄橙	素・長		
34	SK24	土師器	長甕	—	—	—		に赤い根・に赤い根	素・長		
35	SK24	土師器	長甕	17.2	—	—		に赤い根・に赤い根	素・長・チ		
36	SK24	土師器	長甕	16.0	—	—		に赤い根・に赤い根	素・長		
37	SK24	土師器	長甕	18.8	—	—		根・根	素・長・海・繩		
38	SK27	須恵器	杯蓋	—	—	—		灰・黄灰	素・長		小泊産
39	SK27	須恵器	杯蓋	—	—	—		灰・灰	長		小泊産
40	SK27	須恵器	杯蓋	15.1	—	—		灰暗・灰黄褐	素・長		小泊産
41	SK27	須恵器	杯蓋	15.6	—	—		灰・黄灰	素・長		小泊産
42	SK27	須恵器	杯蓋	15.2	—	—		灰・灰	長		小泊産
43	SK27	須恵器	無台杯	—	7.7	—	右	黄褐・浅黄橙	素・長		底部へラ切り 小泊産
44	SK27	須恵器	無台杯	—	—	—		灰・灰	長		黒い吹き出し 小泊産
45	SK27	須恵器	有台杯	13.8	8.8	—		灰・灰白	素・長		
46	SK27	土師器	碗	11.7	6.0	3.8		灰白・浅黄橙	素・長		
47	SK27	土師器	碗	—	7.1	—		浅黄橙・浅黄橙	素・長		
48	SK27	土師器	碗	—	6.0	—		浅黄橙・浅黄橙	素・長・繩		
49	SK27	土師器	小甕	—	—	—		浅黄橙・に赤い根	素・長		
50	SK27	土師器	小甕	—	7.1	—		根・浅黄橙	素・長		底部系切り
51	SK27	土師器	小甕	—	—	—		浅黄橙・に赤い根	素・長		
52	SK27	土師器	長甕	—	—	—		に赤い根・淡根	素・長・繩		
53	SK27	珠洲	甕	—	—	—		暗青灰・暗灰	素・長・海		外面:平行タタキ 内面:円形押圧痕
54	SE3	瓶	小甕	11.6	—	—		輪色調オーライブ黄	色調	に赤い黄橙	
55	SE5	白磁	皿	—	3.2	—		輪色調)淡黄	色調	灰白	

No.	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	回転	色調(外・内)	胎土	備考
56	SE15	土師器	長甕	—	—	—	灰黄褐・に赤い黄褐	英	外面:平行タタキ	
57	SE16	青磁	碗	—	—	—	釉色(黄)灰灰	色調:灰白		
58	SE19	珠画	片口鉢	—	8.2	—	に赤い黄褐・黄褐	英・長	内面:鉗し目	
59	SE22	須恵器	杯蓋	15.0	—	—	灰・灰	英・黒	小泊産	
60	SE22	須恵器	有台杯	10.9	6.4	4.0	青灰・青灰	英・長		
61	P142	珠画	圓か壺	—	—	—	黄灰・灰	英・白・黒	外面:平行タタキ 内面:円形押圧痕	
62	P142	珠画	壺	—	10.8	—	陶灰・黄灰	英・長	外面:平行タタキ	
63	SD5	青花	皿	9.8	5.1	2.4	—	色調:灰白		
64	SD6	珠画	片口鉢	33.3	—	—	黄灰・黄灰	英・長・海	内面:化物付着	
65	SD6	珠画	片口鉢	33.4	13.9	10.5	灰・灰	英・長・海	内面:鉗し目	
66	SD6	珠画	片口鉢	—	—	—	灰黄・灰黄	英・長・海・チ	内面:鉗し目	
67	S32	珠画	壺	—	—	—	灰・灰	英・白	外面:平行タタキ 内面:円形押圧痕	
68	249	須恵器	無台杯	11.8	7.0	3.2	灰オリーブ・灰オリーブ	英・長	底部へラ切り→ナデ 小泊産	
69	248	須恵器	無台杯	11.4	7.4	3.2	灰・灰	英・長	底部へラ切り→ナデ 小泊産	
70	243	須恵器	無台杯	11.8	6.6	3.2	灰・灰	英・長・チ・白		
71	244	須恵器	無台杯	11.8	6.6	3.1	灰オリーブ・灰オリーブ	英・長	底部へラ切り 小泊産	
72	表探	須恵器	無台杯	—	7.0	—	灰・灰	英・長・海	外部底面に墨書「口」 小泊産	
73	242	須恵器	無台杯	—	5.8	—	灰・灰	英・長	底部系切り	
74	243	須恵器	無台杯	—	8.2	—	灰・灰	英・長・繩		
75	242	須恵器	無台杯	—	6.5	—	灰・灰	英・長	底部へラ切り 小泊産	
76	243	須恵器	有台杯	—	4.9	3.2	灰・灰	英・長		
77	243	須恵器	有台杯	14.4	—	—	灰・灰	英・長・白		
78	143	須恵器	有台杯	—	7.0	—	灰・灰白	英・長・黒	黒い吹き出し 小泊産	
79	244	須恵器	小甕	15.1	—	—	灰・灰	長	小泊産	
80	242	須恵器	壺	—	—	—	灰・灰	英・長	小泊産	
81	643	土師器	碗	—	5.6	—	橙・橙	英・長・海		
82	248	土師器	碗	12.0	6.4	3.4	橙・橙	英・長	底部系切り	
83	248	土師器	小甕	—	7.4	—	浅黄褐・淡黄褐	英・長・チ		
84	242	土師器	小甕	—	8.4	—	浅黄褐・淡黄褐	英・長・チ		
85	248	土師器	小甕	14.4	—	—	浅黄褐・淡黄褐	英・繩		
86	243	土師器	長甕	15.8	—	—	に赤い黄褐・灰白	英・長・チ		
87	5A	珠画	壺	—	—	—	灰・灰	英・長・黒		
88	143	珠画	片口鉢	—	10.4	—	灰・灰	英・長・海	内面:鉗し目 外面底部:静止系切	

木製品観察表

No.	出土地点	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
89	P90	木製品	柱根	20.8	18.7	—	芯持丸木
90	SE6	漆器	碗	—	底径: 7.8	—	
91	SE12	木製品	円形曲物	様: 9.4	—	(3.6)	極目
92	SE12	木製品	円形曲物側板	(13.0)	2.2	—	極目
93	SE13	木製品	刀子柄	11.7	2.6	1.3	極目

石製品観察表

No.	出土地点	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
94	SE5	石製品	砾石	(6.3)	3.9	1.6	47.7	
95	SE2	石製品	石臼	径: (16.0)	—	14.2	3380.0	
96	SD6	石製品	石臼	径: 29.9	—	8.5	10690.0	

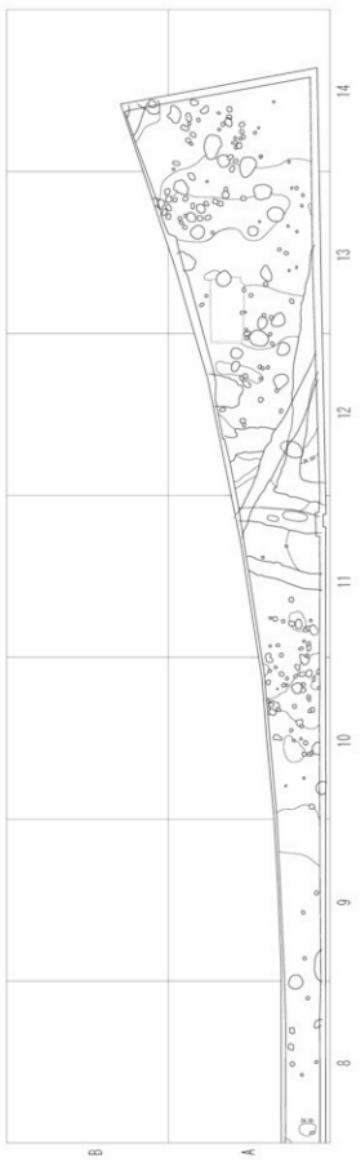
錢貨観察表

No.	出土地点	種別	銭名	初鑄年	直径(cm)	重さ(g)	備考
97	SK12	錢貨	天聖元寶	1023年	2.5	1.5	
98	SK12	錢貨	天聖元寶	1023年	2.4	1.7	
99	SK12	錢貨	景祐元寶	1034年	2.4	2.0	
100	SK12	錢貨	皇宋通寶	1038年	(2.5)	1.8	
101	SK12	錢貨	元豐通寶	1078年	2.4	2.2	
102	SK12	錢貨	元豐通寶	1078年	(2.2)	0.9	
103	SK12	錢貨	祐祐通寶	1096年	2.4	1.3	

遺跡全体図

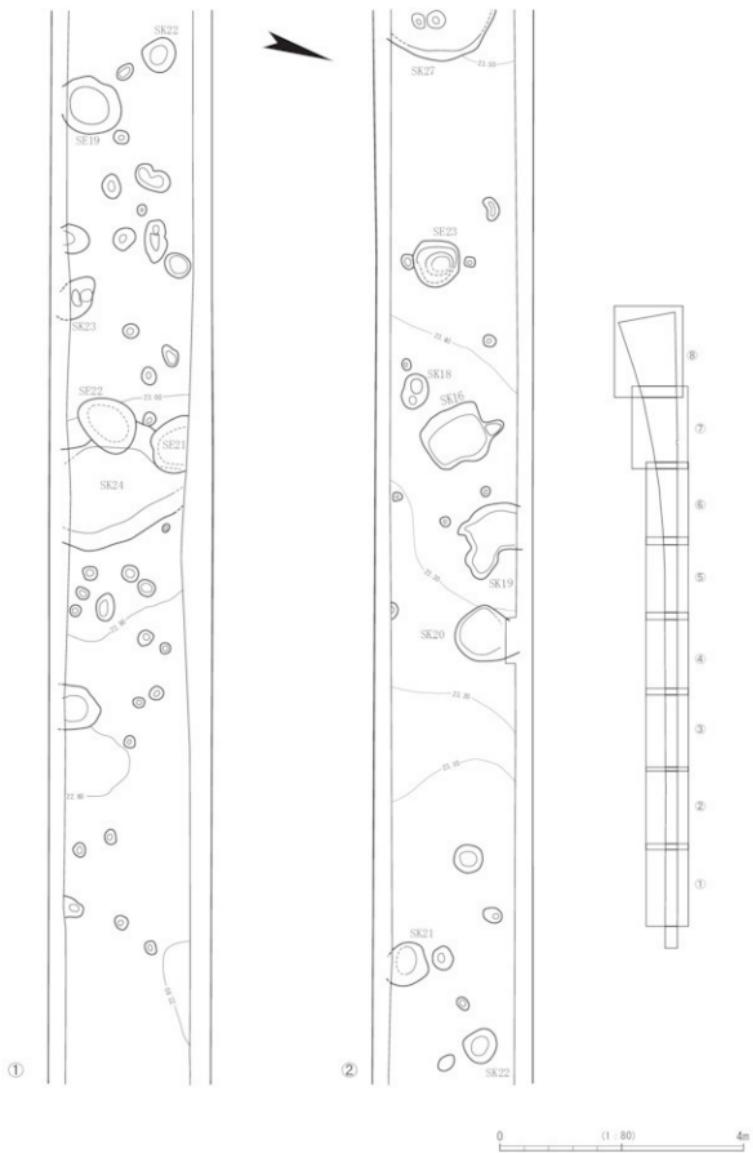


図版 1



遺跡全体図

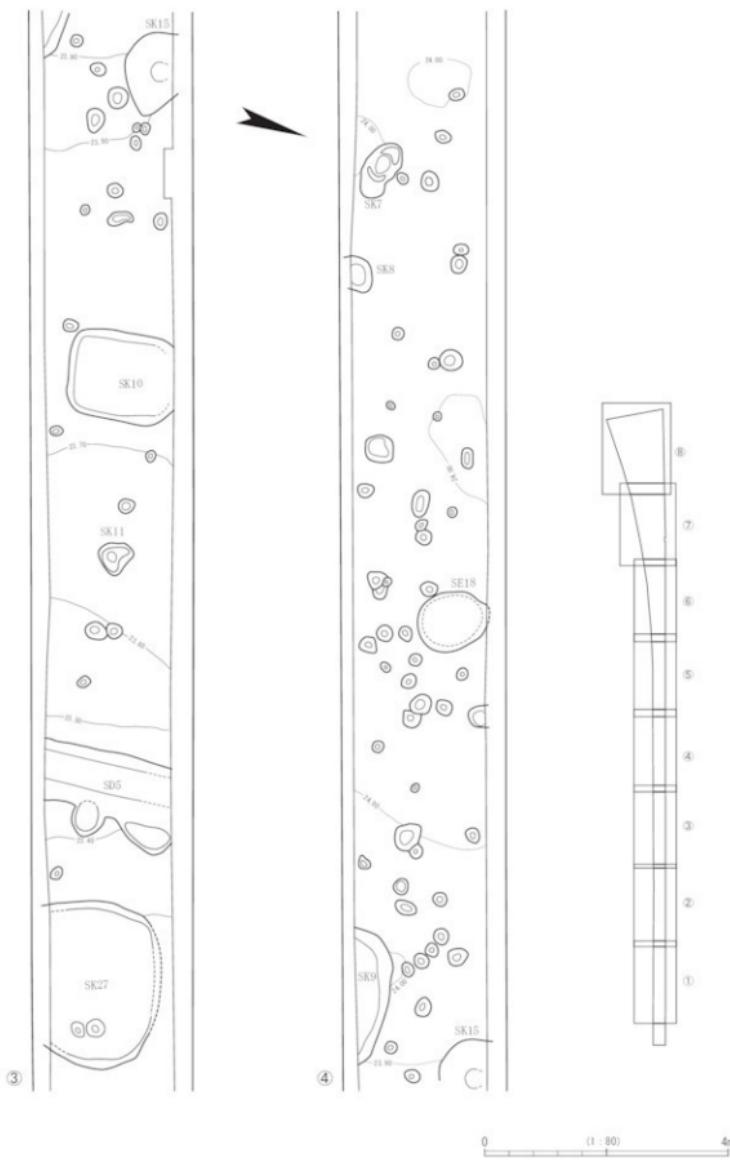
図版 2



造構平面分割図 1

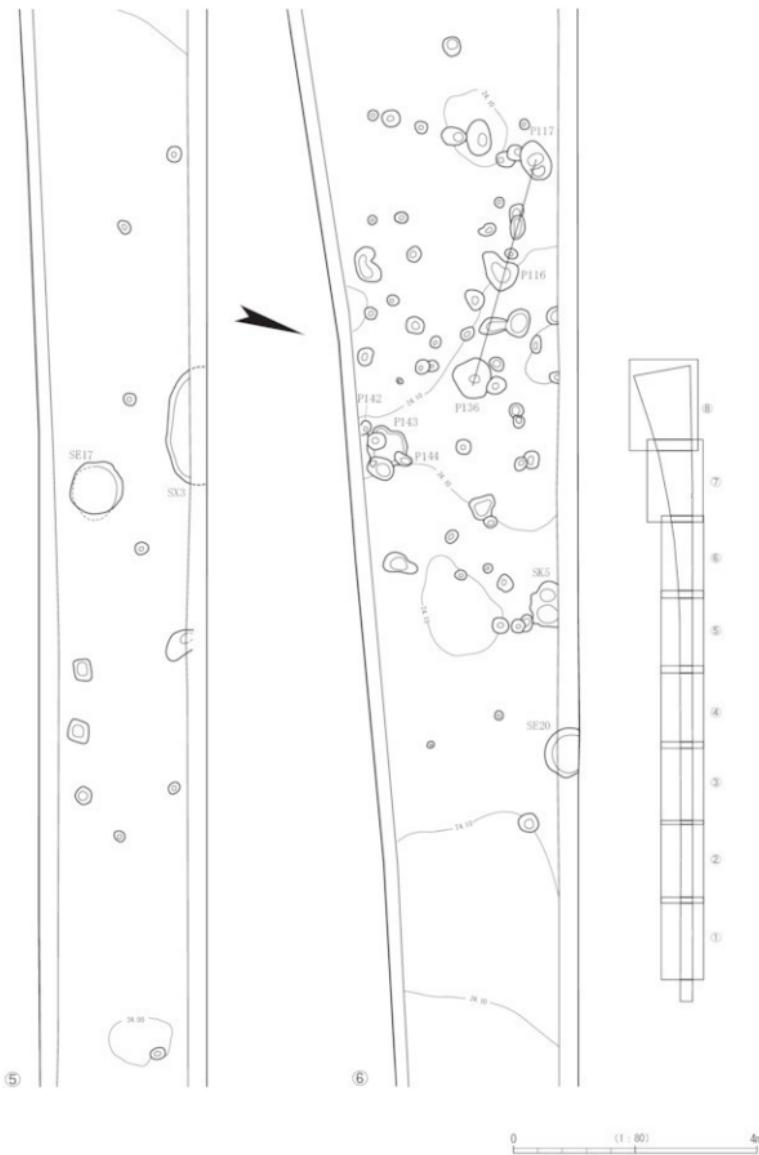
## 遺構平面分割図 2

図版 3



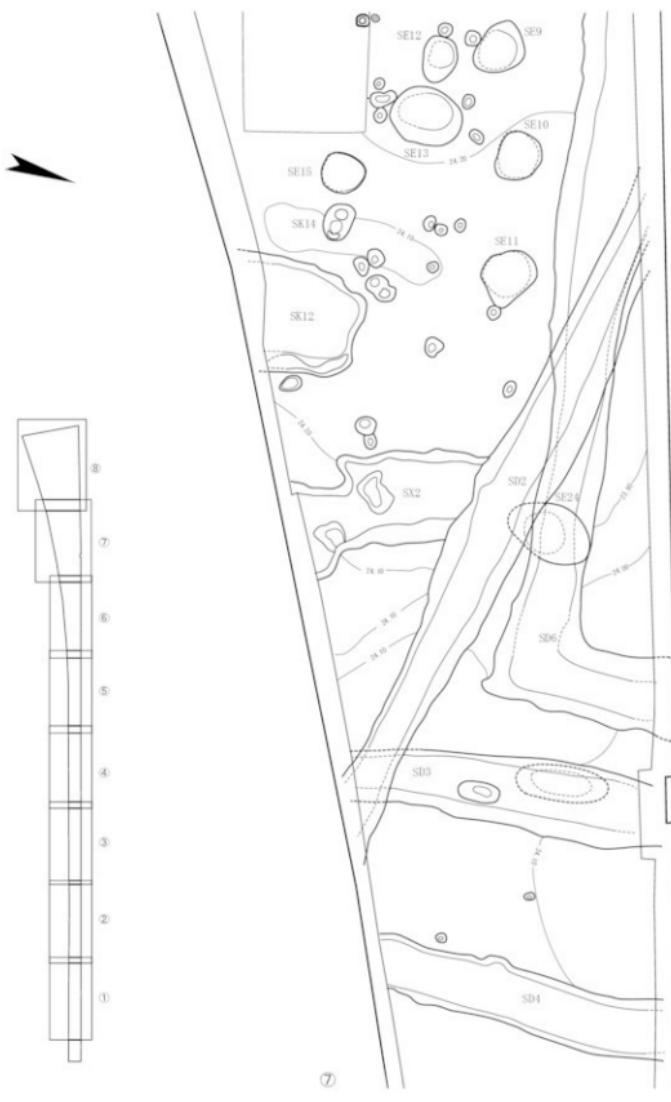
図版 4

遺構平面分割図 3

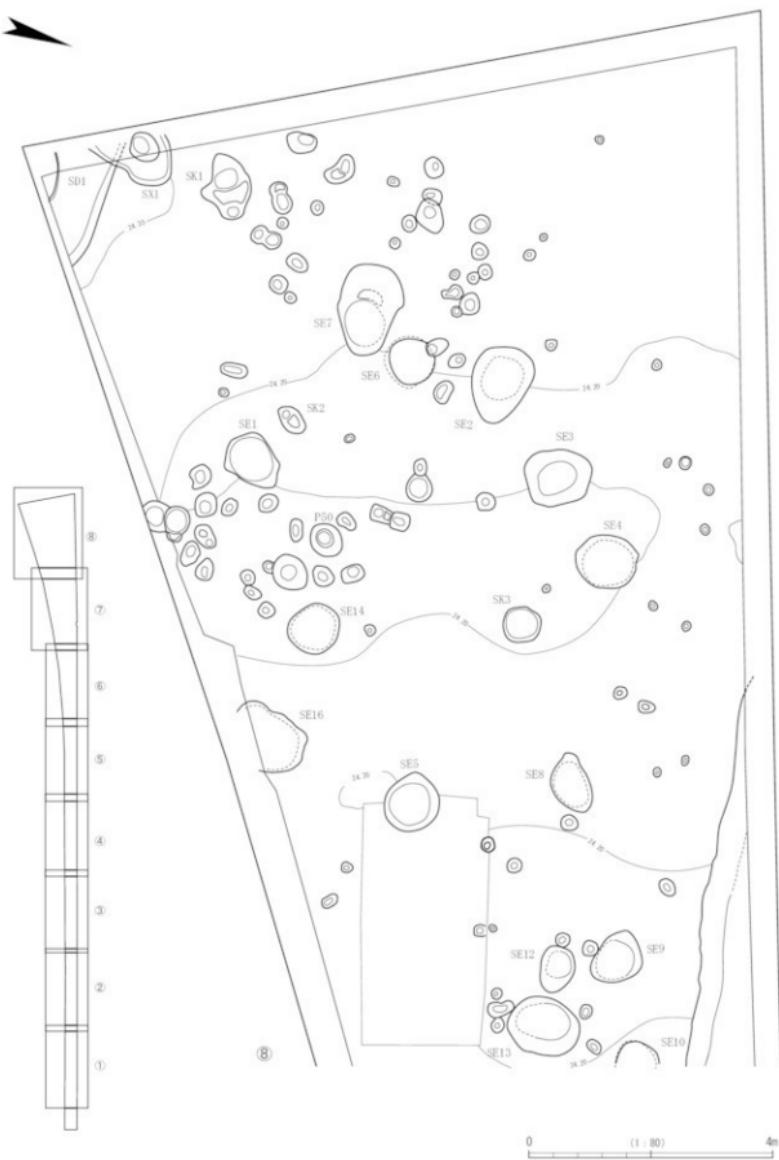


造構平面分割図 4

図版 5

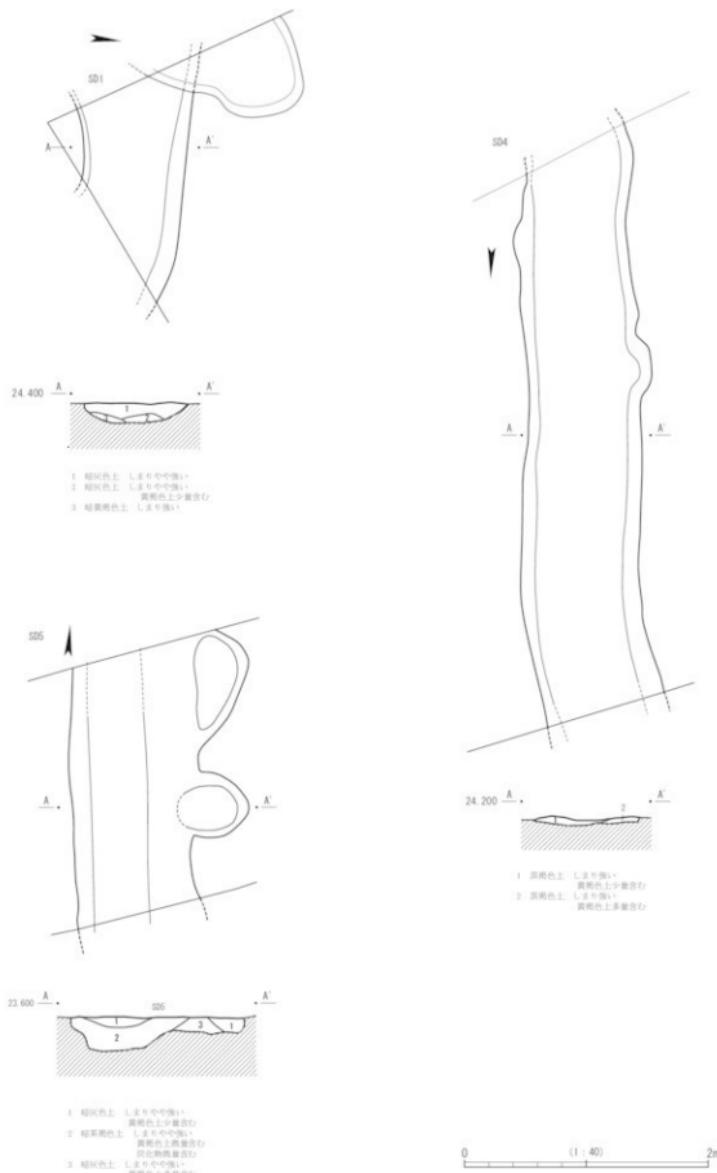


0 (1 : 80) 4m



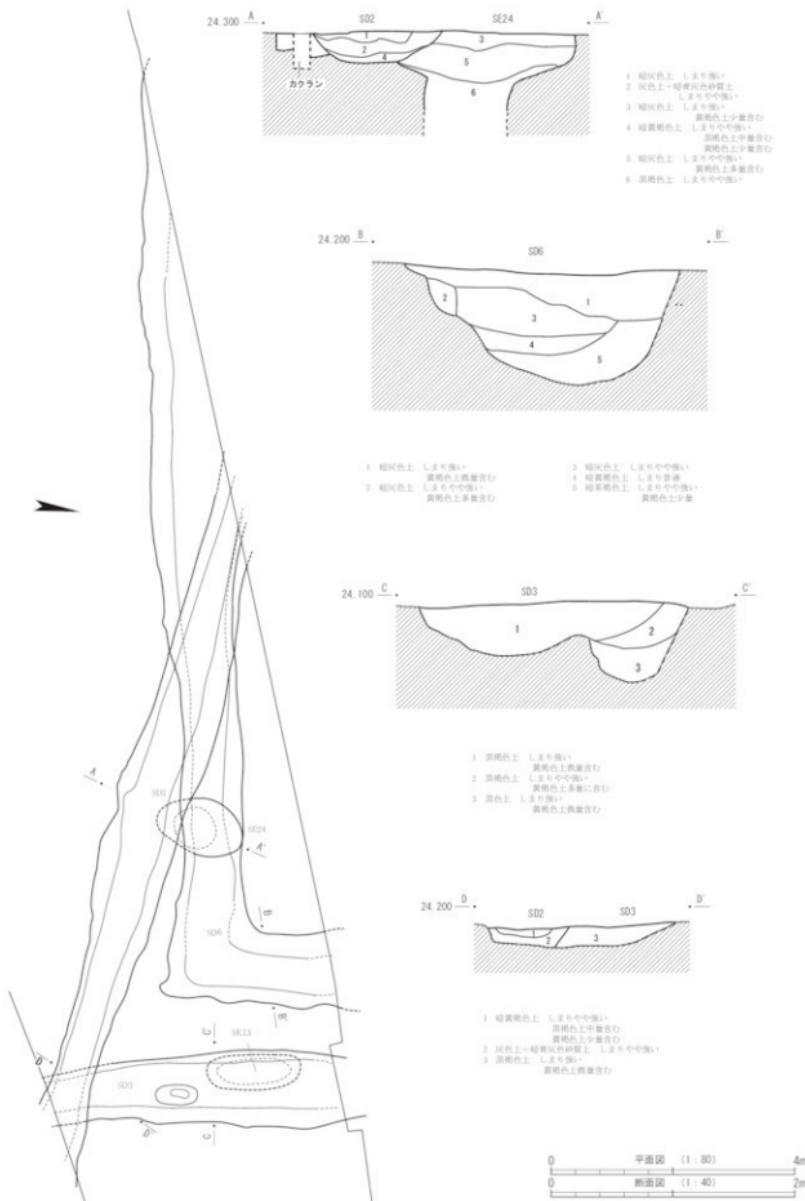
個別遺構図 1

図版 7



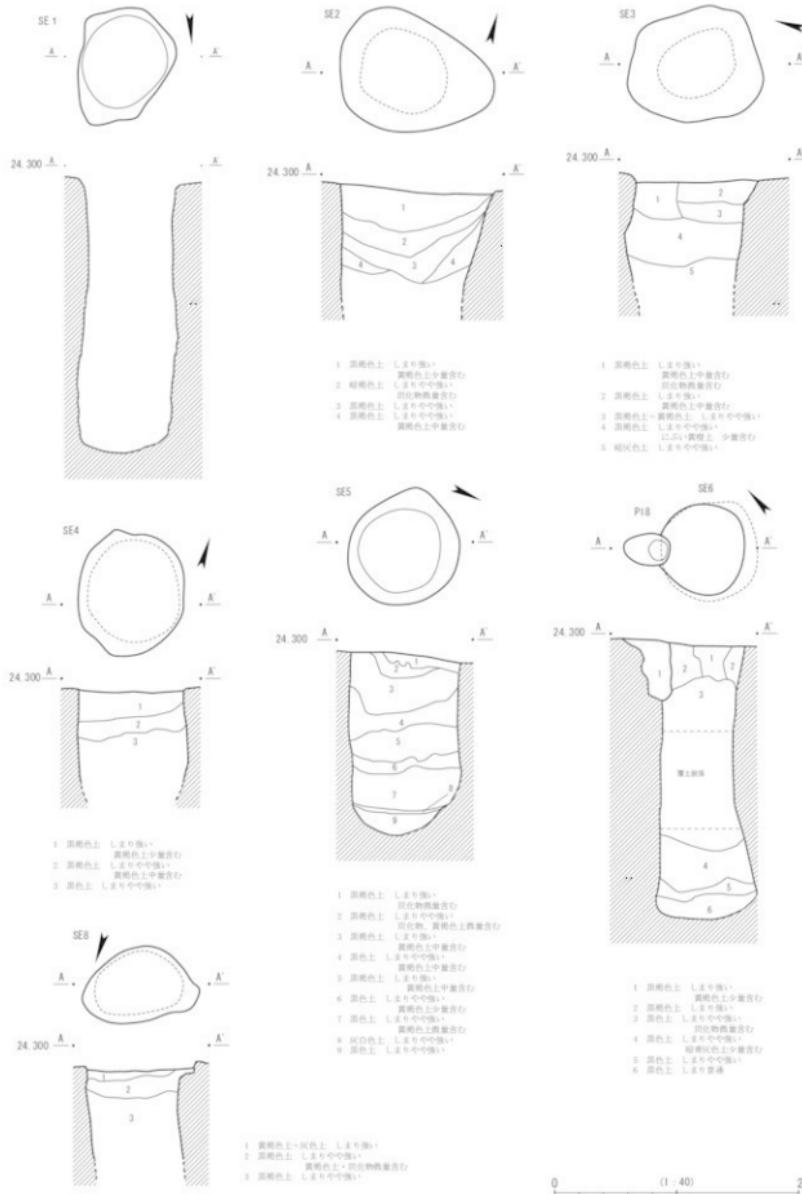
図版 8

個別構造図 2



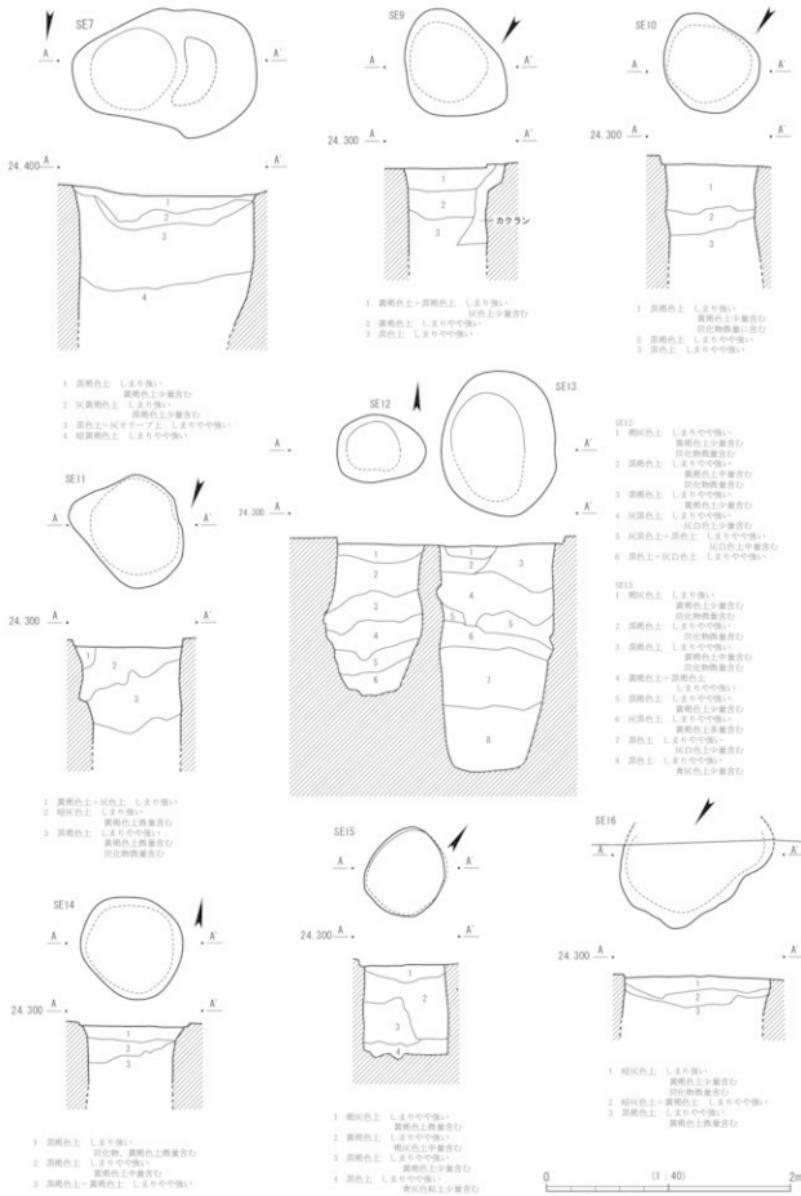
個別遺構図3

圖版 9



圖版10

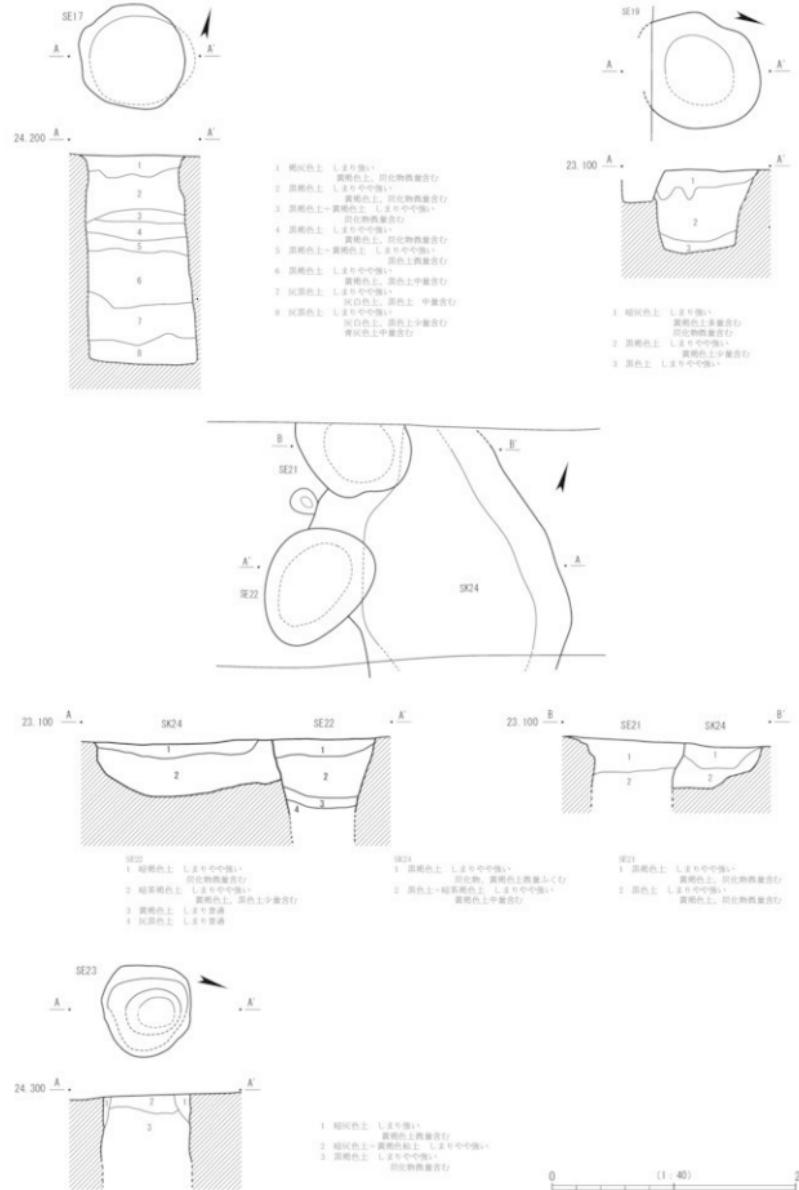
個別構造図 4



0 (1 : 40) 2m

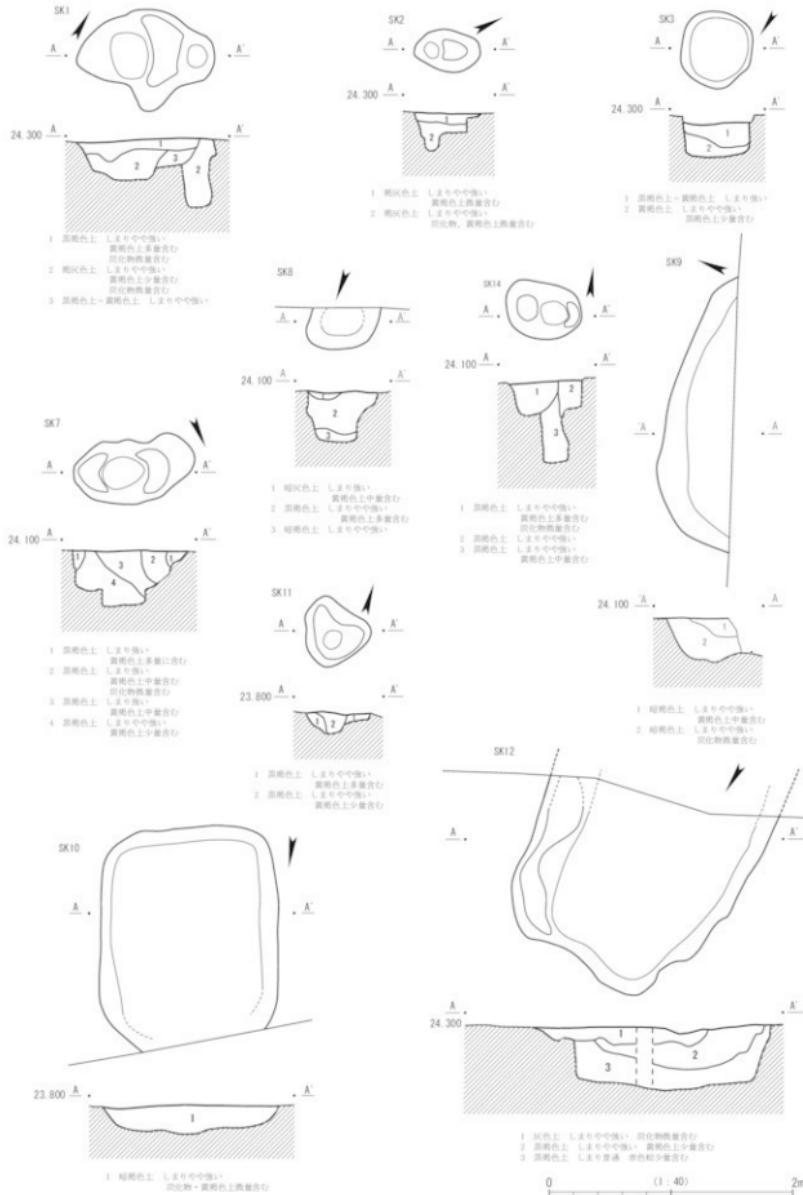
個別造構図5

圖版1



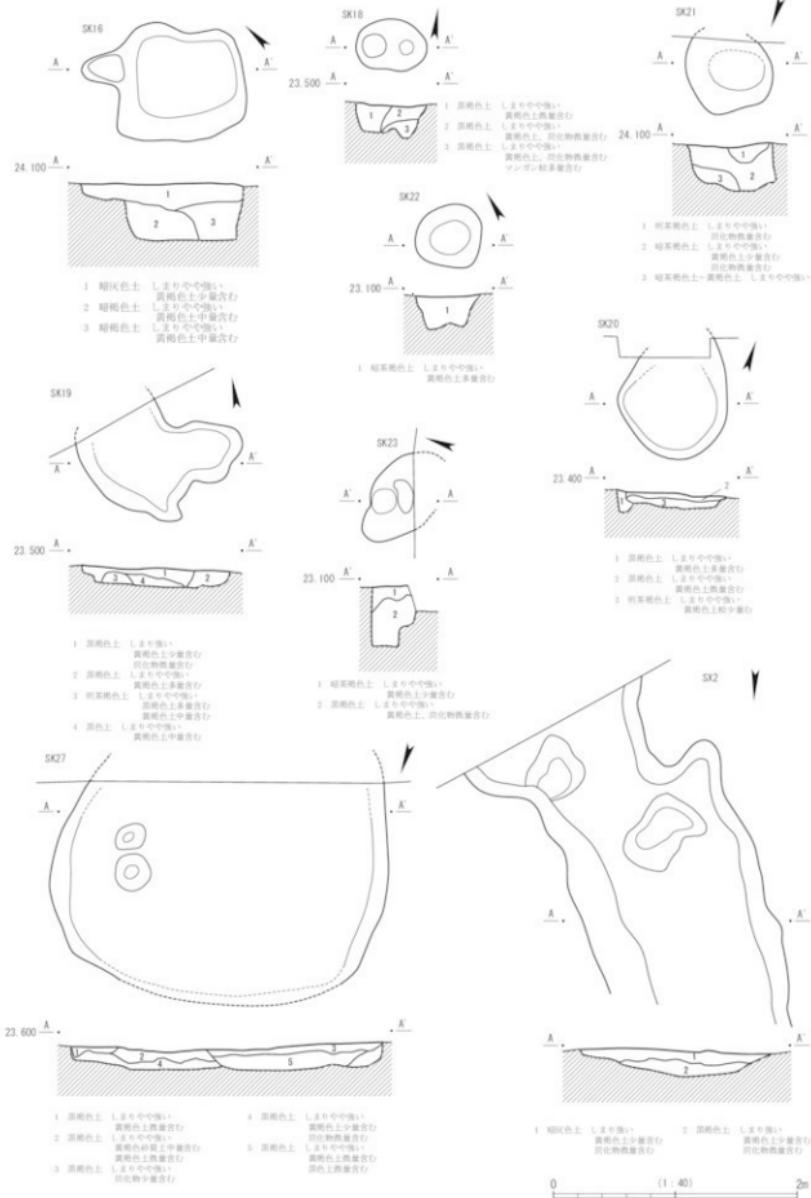
図版12

個別遺構図6



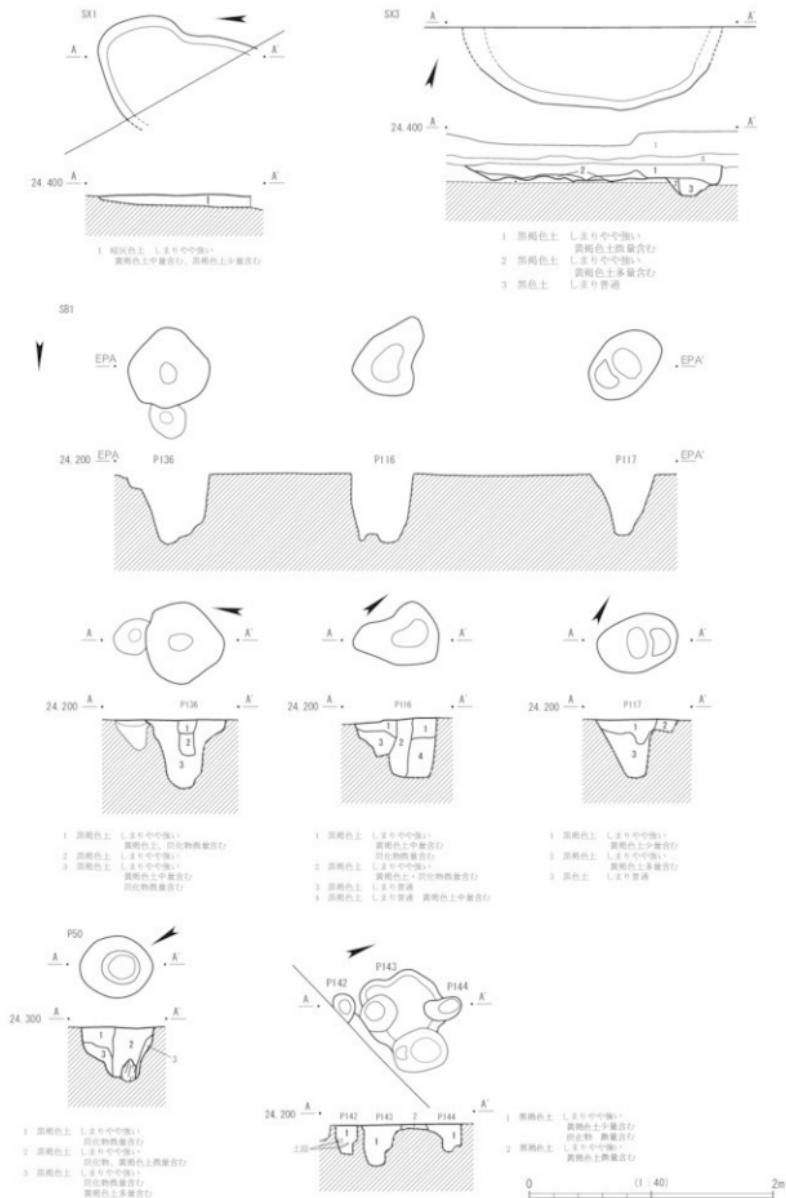
個別遺構図 7

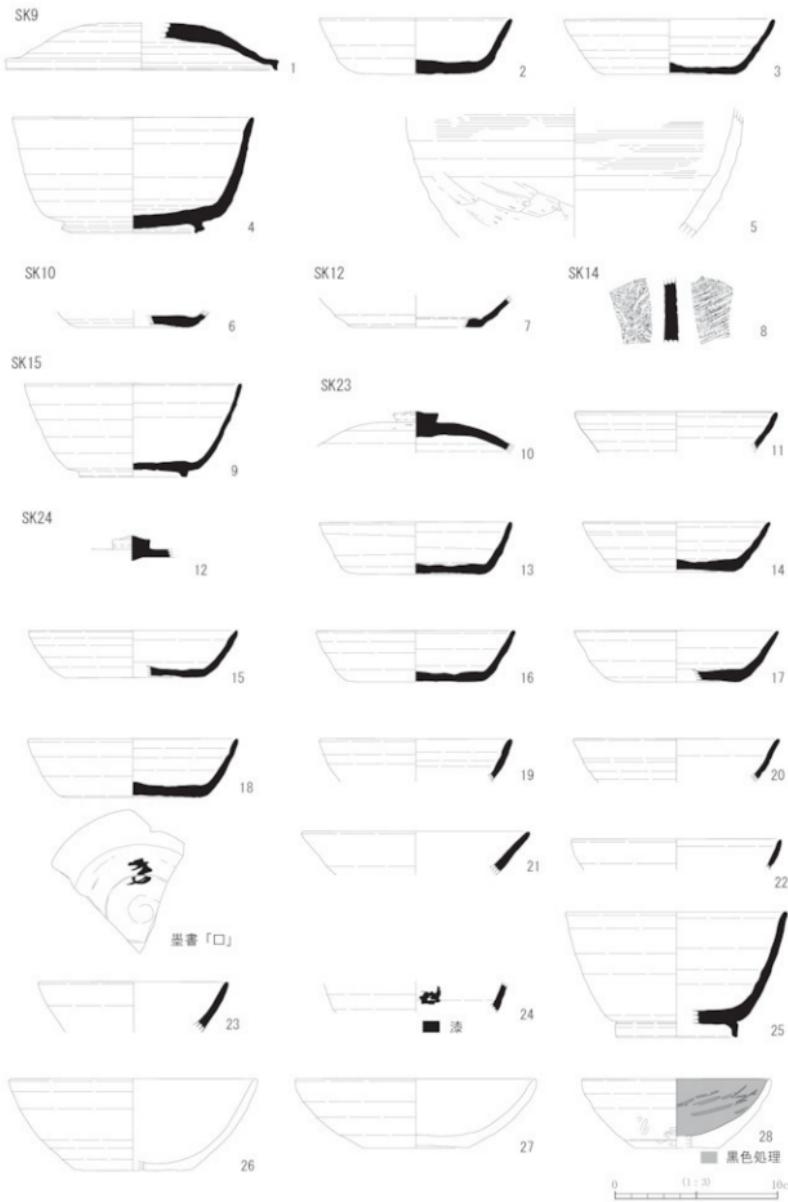
圖版13



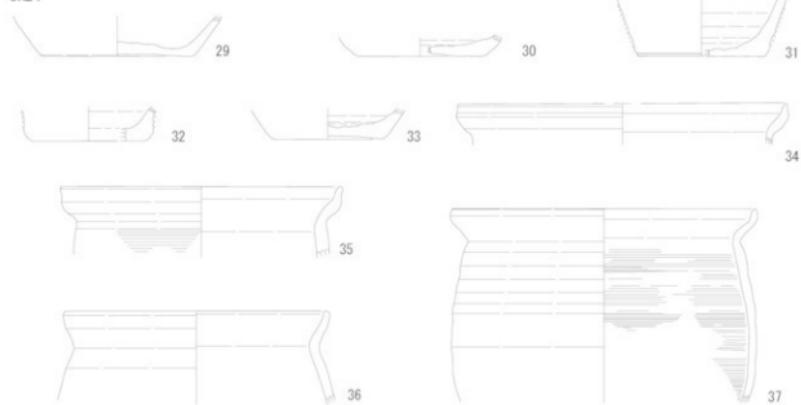
圖版 14

個別構造図 8

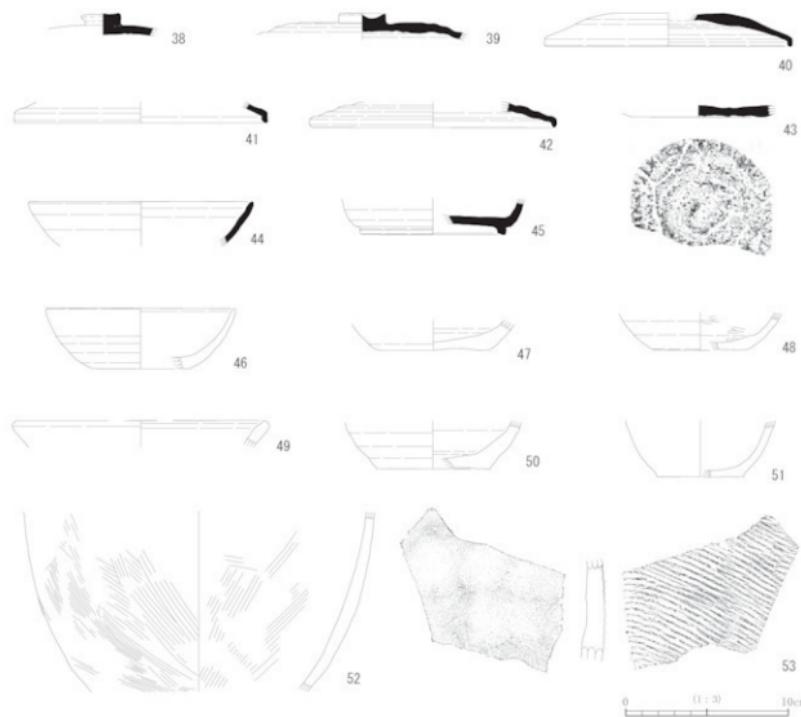


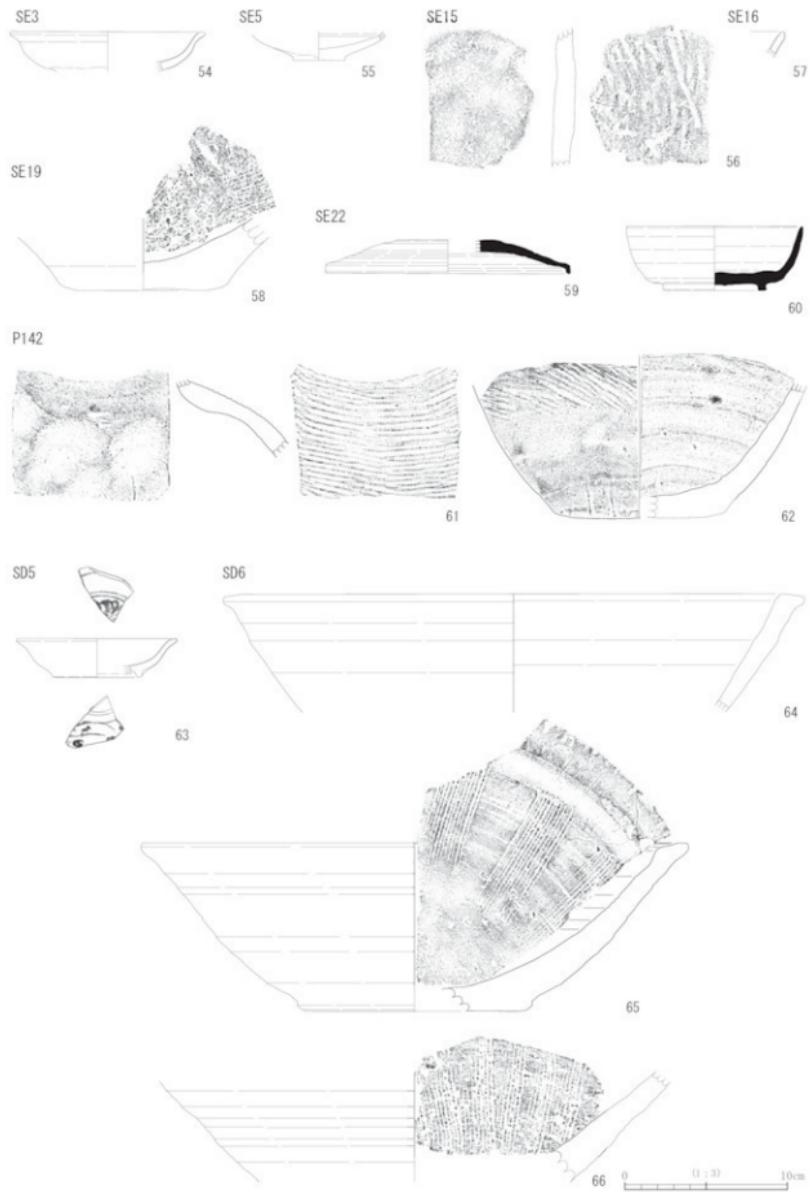


SK24



SK27





SX2



遺構外出土



68



69



70



71



墨書「口」

72



73



74



75



76



78



79



80



81



82



83



84



85

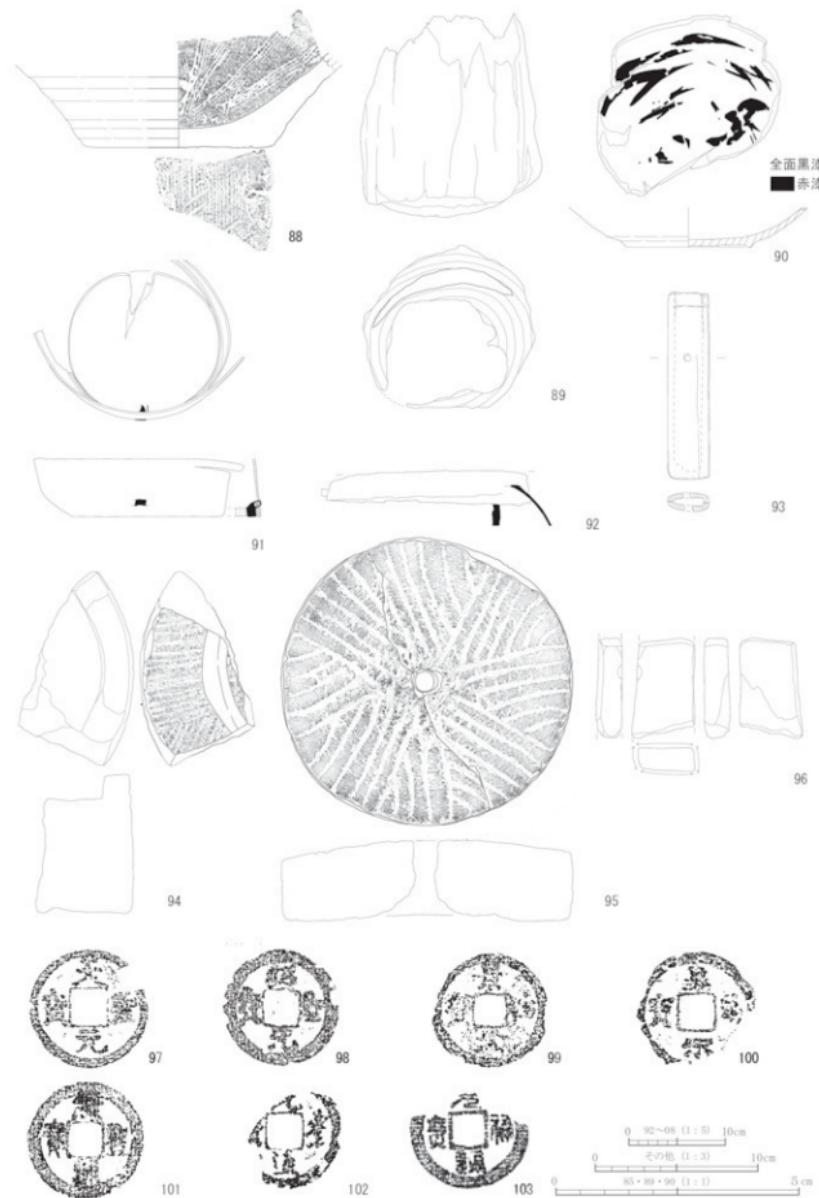


86



87

0 (1 : 3) 10cm





遺跡全景（北東から）



遺跡全景



SD2・3 断面（南東から）



SD3 断面（北から）



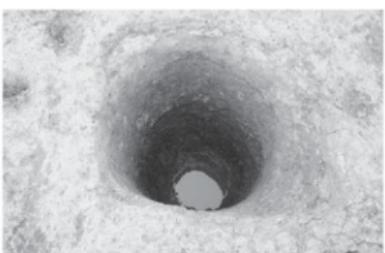
SD4 断面（北から）



SD5 断面（北から）



SD6 断面（南から）



SE1 完掘



SE5 完掘（東から）



SE8 断面（北から）



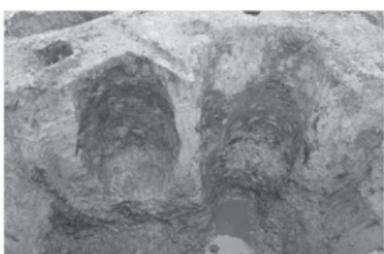
SE15 断面（南から）



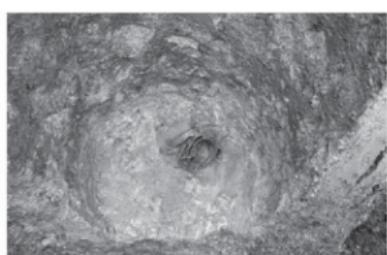
SE15 完掘（南から）



SE12・13 断面（南から）



SE12・13 完掘（南から）



SE12 遺物出土状況（南から）



SE19 断面（東から）



SE17 断面（南から）



SE17 完掘（南から）



SE22・SK24 断面（北から）



SE23 断面（東から）



SK3 断面（北から）



SK9 断面（西から）



SK10 完掘（北から）



SK11 断面（南から）



SK12 断面（北から）



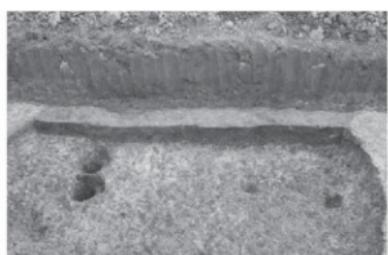
SK12 完掘（北から）



SK16 剖面 (南西から)



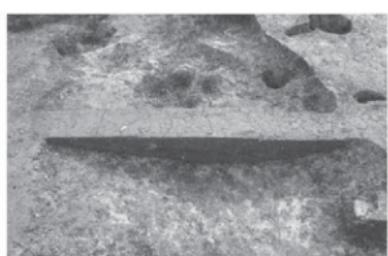
SK16 完掘 (南西から)



SK27 剖面 (北から)



SX1 剖面 (西から)



SX2 剖面 (北から)



SX3 剖面 (南から)



作業風景1



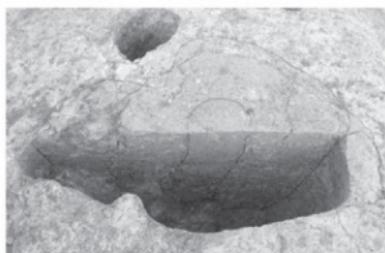
作業風景2



SB1 完掘



P136 断面（西から）



P116 断面（東から）



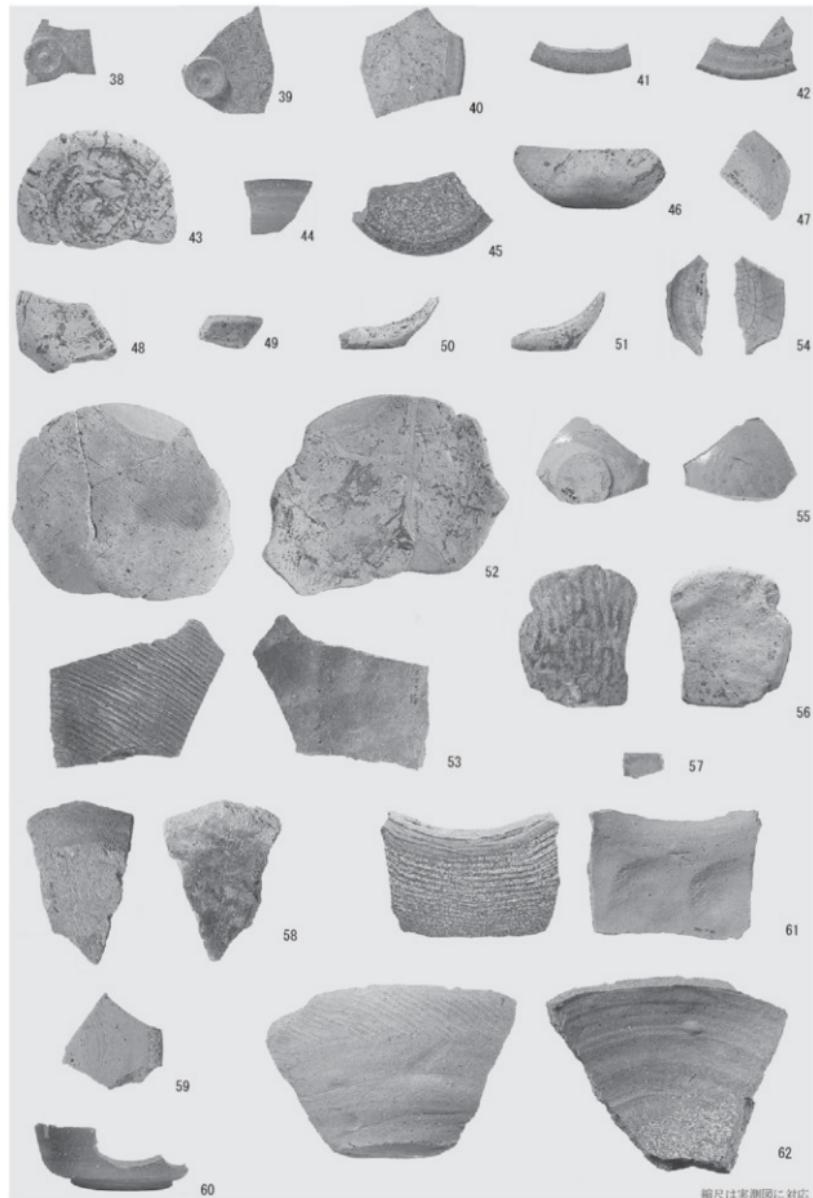
P117 断面（南から）



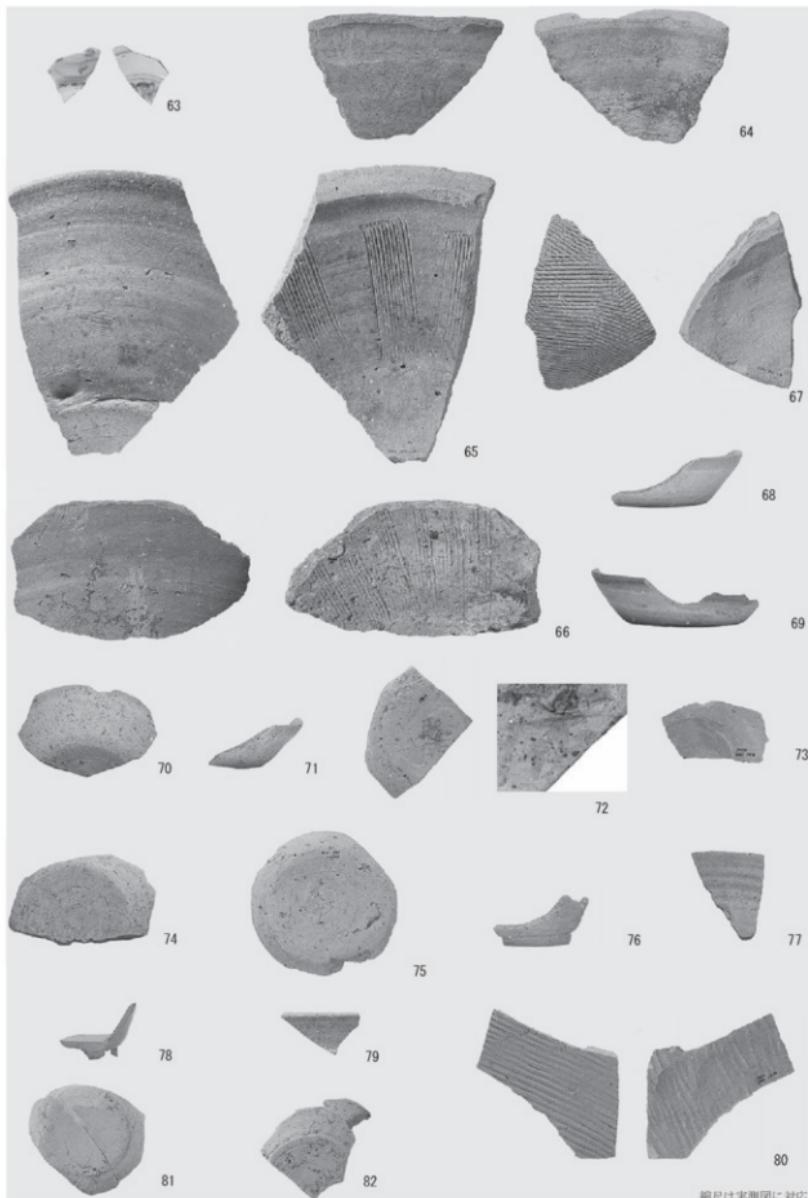
P50 断面（東から）



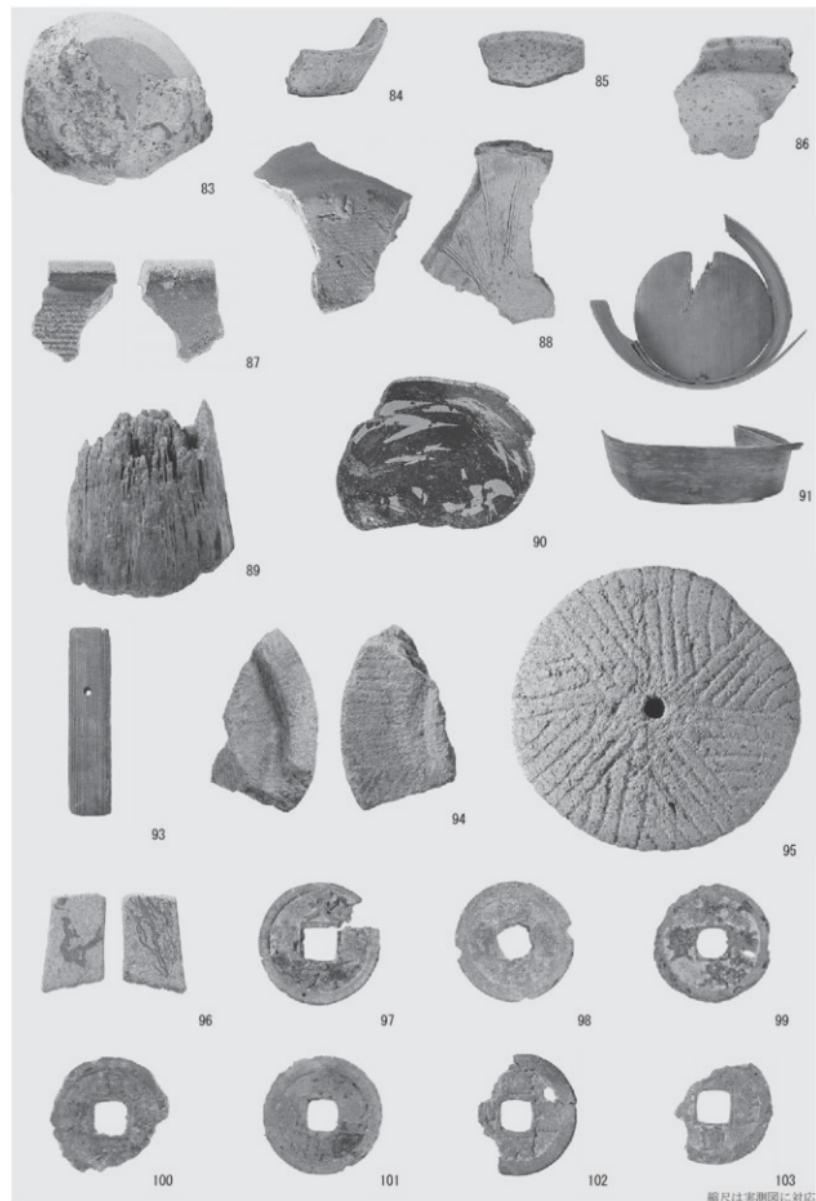
縮尺は実測図に対応



縮尺は実測図に対応



縮尺は実測図に対応



縮尺は実測図に対応

## 報告書抄録

ふりがな	したやしきいせき							
書名	下屋敷遺跡							
副書名	市道王寺川 48 号線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山賀和也							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町 2 番地 1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2011 年 1 月 31 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
下屋敷遺跡	新潟県 長岡市 門原町1丁目	15021	72	37° 27' 40"	138° 46' 55"	20090928 ~ 20091127	522 m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下屋敷遺跡	集落跡	平安時代 (9世紀前半 ~中葉)	土坑	土師器・須恵器				
		中世 (14~15世紀)	土坑・溝・井戸	珠洲焼・青磁・青花・ 木製品(漆器・曲物・ 刀子柄)・石臼・古錢				

### 下屋敷遺跡

市道王寺川 48 号線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成 23 (2011) 年 1 月 31 日 印刷

平成 23 (2011) 年 1 月 31 日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社 文化